

令和2年（2020年）度

在外教育施設派遣教員 帰国報告集



兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

はじめに

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

会長 松本 肇仁

(姫路市立伊勢小学校長)

平素より、兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）の諸活動・事業に対して、ご理解・ご協力を頂き、心より感謝申し上げます。私たち兵海研は、在外教育施設への派遣経験をもとに、国際理解教育・多文化共生教育・帰国子女教育などの取組を推進しています。「兵庫から良い先生を世界に送り出そう！」を合言葉に、在外教育施設からの帰国教員による帰国報告会や多文化共生・国際教育セミナー(派遣希望者研修会)、派遣教員への支援活動、情報交換会等の諸事業に取り組んでまいりました。

令和元年度末・令和2年度初めの学校は、新型コロナウイルス感染症のため、異例尽くしの状態になりました。感染が拡大する中で、十分なお別れもできず帰国された先生方もおられると思います。何はともあれ、派遣教員の皆様やご家族の皆様が、責務を全うされ、無事に帰国されましたことを心よりお喜び申し上げます。帰国後、4か月が過ぎ、「海外での勤務は遠い過去のように…」と感じられておられるかもしれません。「海外での貴重な経験を、帰国後どのように活かしていくか」ということが次の大きな課題です。多くの先生方にとって、在外教育施設で過ごされた年月よりも、これからの教員生活の方が長いです。帰国後すぐに、今の学校や学級、地域で活かすことができるというほど、簡単なことではありません。しかし、教育界または社会も、皆様の貴重な経験を求めています。グローバルな時代と言われる今日、多様な文化・価値観を尊重する態度や、外国語・異文化への柔軟な対応力、国際的な人権感覚、自分の意見を持ち積極的に交流を図るコミュニケーション能力など、先生方が海外で身につけられた資質・能力は、日本人全体、とりわけ未来に生きる子供たちに求められるようになっていきます。ぜひ、日々の教育をはじめ、様々な場面で創意工夫しながら、海外での経験を生かしていただきたいと願っています。

この原稿を書いている7月現在、4月派遣予定だったのに、まだ任国に飛び立つことができず日本で待機されている先生方がたくさんおられます。多くの先生が、先行きが見通せない中、日本にいららりもリモート授業を行っておられます。日々、海外の子どもたちのために尽力していただいている先生方に敬意を表したいと思います。1日も早く赴任され、直接、子どもたちに指導できる日が来ることを願っています。

兵海研でも、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、例年5月に行っていた総会は、8月に延期になりました。例年6月に実施していた帰国報告会は、中止となりました。今年度計画している活動は、感染状況を見ながらの対応になります。急な変更もあると思いますが、ご了承をお願いします。

このような状況下でも、令和3年度派遣・4年度派遣登録の先生方の選考は進められています。「兵庫から良い先生を世界に送り出そう！」の合言葉のもと、感染防止に留意しながら研修を進めてまいります。

兵海研の活動に対し、兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会、兵庫OV教員研究会、青年海外協力隊兵庫県OB会等、多くの方々のご支援・ご協力をいただいていますこと、心より感謝申し上げます。今後とも、兵海研の諸事業にご理解とご協力をよろしくお願いします。

帰国報告書 目次

1 天津日本人学校	加古川市立別府西小学校	西村 一将	……	1
2 ジッダ日本人学校	相生市立双葉小学校	竹山 森汰郎	……	3
3 サンタ・エレナ小学校	宝塚市立美座小学校	山口 敦司	……	5
4 ブエノスアイレス日本人学校	神戸市立平野中学校	岸本 紗矢子	……	7
5 カロス・ガルバイ特別支援学校	赤穂特別支援学校	赤鏑 千春	……	9
6 デュッセルドルフ日本人学校	加古川市立陵南中学校	西尾 由紀子	……	11
7 バンコク日本人学校	加古川市教育委員会	中村 陽希	……	13
8 バンコク日本人学校	西宮市立甲子園浜小学校	林 由加子	……	15
9 ブエノスアイレス日本人学校	丹波市立柏原中学校	久保田 信	……	17
10 ブラッセル日本人学校	淡路市立多賀小学校	古川 英治	……	19
11 マニラ日本人学校	神戸市立飛松中学校	槇本 龍	……	21
12 ミラノ日本人学校	尼崎市立中央中学校	北野 貴誠	……	23
13 大連日本人学校	丹波篠山市立八上小学校	崎田 真宏	……	25
14 広州日本人学校	南あわじ市・洲本市組合立 広田中学校	河野 真也	……	27
15 上海日本人学校虹橋校	宝塚市立丸橋小学校	山本 佳奈	……	29
16 深圳日本人学校	神戸市立だいち小学校	吉田 茉由	……	31
17 バンドン日本人学校	芦屋市立宮川小学校	田邊 晃子	……	33
18 シカゴ日本人学校	明石市立鳥羽小学校	白根 佐知子	……	35
コロナ対策 帰国前・帰国後			……	37

中華人民共和国 天津日本人学校に赴任して

加古川市立別府西小学校 西村一将

1 赴任地の概観

天津市は、南北の長さ約 186 km、東西の広さ約 101 km、周囲との長さ約 900 km、海岸線の長さ約 133 km、総面積が約 11.305 平方km、北緯 38 度 34 分、東経 116 度 42 分の位置にある中国中央政府の四大直轄都市の 1 つである。また、環渤海湾地域の経済的中心地であり、中国北方最大の国際港を持ち、経済・貿易ともに中心地である。

2 赴任校の概要

天津日本人学校は、児童生徒数の増加に伴い平成 18 年 9 月より公寓（居住地）のひとつでもある九河国際村内から移転し、現在の場所（津南区）に至る。29 年度派遣者が赴任した当初は、150 名ほどであった児童生徒数も元号が令和へと変わった平成 31 年度には、170 名を超えた。後の令和 2 年 8 月には現校舎のリース契約満了に伴い、新校舎への移転も控えている。新校舎では、様々な設備がより充実されており、尚一層の教育活動の発展が見込めることが予想される。派遣 2 年目となる平成 30 年度には、多くのご来賓をお招きし、天津音楽庁にて「日中平和友好条約締結 40 周年式典」「天津日本人学校開校 20 周年記念式典・学習発表会」が執り行われた。歴代の校長先生や天津市政府諸機関、教職員一同で 20 年の歴史を振り返ると共に、天津日本人学校の益々の発展を願う素晴らしい会となった。



3 特色ある教育実践

(1) 国際交流、現地理解教育の充実

天津日本人学校では、現地インターナショナル校、現地校との交流を毎年実施している。インターナショナル校との交流では、英語を用いて様々な国籍の子ども達との関わりを持つことができる。また、現地校交流は、日々の授業から中国語に慣れ親しんだり、学年ごとに中国の文化に触れたりする活動を結び付け、中国に居るからこそ体験できる貴重な学習の場となっている。

(2) 小中併設校としての強み

天津日本人学校は、小中併設校として全校児童生徒が日々同じ学び舎で学校生活を送っている。そのため様々な教育活動や行事では、全校一丸となって取り組むことができる。そして上級生が全校の前に立って活躍する姿は、目指すべきリーダー像として下級生の憧れとなり、代々受け継がれている。

4 成果(派遣教員として得たもの)

天津日本人学校では、29 年度より今まで以上に「組織」を意識して様々な校務にあたってきた。例えば、「学習や校内研究等は、研究部」「様々な行事や生徒指導は、指導部」といったように常設部長が設けられ、仕事の把握や調整を行いながら教務と連携して校務体制を確立していった。常設部長が各分掌の仕事の十分に把握し、各担当と方針をすり合わせをしながら校務を組織として進めていくことの大切さを学んだ。その中でも特に多くの学びがあった点について以下にまとめる。

まず、「校内研究」である。本校では3年間、授業力向上のために「1時間ごとのめあてとまとめがいかに大切か」を重視し、実践してきた。これは、天津日本人学校が目指している児童生徒の学力向上にも直結する取り組みであった。私は2年目に研究部主任を務めた。そして、レベルの高い子ども達だからこそできる色々な実践に挑戦したり、職員間で授業についての議論を深めたりできる良さをさらに伸ばしていくことに努めた。手立てとしては、日本全国から集まった教職員の全研究授業を参観させていただき、授業者一人一人と授業についての意見交換を行った。そして、そこからの学びを「研推便り」として学校全体に発信・共有することで、校内研究や日々の授業への意識を高めるきっかけ作りを行った。この取り組みは、次年度にも引き継がれており、大きな成果を感じることができた。

次に、「生徒指導」である。生徒指導では、今までの小学校現場での経験を大きく覆されたと言っても過言ではない。生徒指導と聞くと恥ずかしながら今までの私は、「子どもの問題行動の指導」としか認識していなかったのが本音である。だが、天津日本人学校の指導部では、「生徒指導の三機能（共感的人間関係を育む、自己存在感を与える、自己決定の場を与える）」に基づき、いかに児童生徒一人一人の自己実現をしていくことが重要かといった考え方を学ぶことができた。また、実際の指導においては徹底した事実確認を行ったうえで指導方針を明確にし、指導部長と連携して指導にあたる組織としての動きがいかに大切かを学んだ。あわせて生活指導のみならず学級の様々な場面、授業など、どの場面においてもこの方針を基に指導にあたる重要性を認識することができた。そうして、全教職員が一貫性を持ち、子ども達の良さを引き出してあげられる学校は、子ども達がいきいきと学校生活を安心して送ることができると、日本人学校の児童生徒の姿から実感できた。この経験は、今後の教師人生の糧になると強く感じた。

最後に、「高学年ブロック主任」である。ブロック主任とは、日本で言う学年主任の役割を担っており、まだまだ経験年数が浅い自分にとっては初めての経験だった。年度当初は、今までのキャリアや校種も違うメンバーが集まった小集団で、いかに同じ意識で日々の指導に当たることができるかが課題であったが、「報告・連絡・相談」の徹底を毎日呼びかけ、取り組んだ。また、今まで以上に学年の先生方に声を掛ける回数を意識して増やしたり、他学年（4・5年生）の児童理解に努めたりした。大きな成果は、高学年ブロックでは同じ意識を共有して日々の校務や指導にあたることができたことである。時には、子どもへの指導が思うようにいかない場面もあったが、その都度「どこに問題点があったか。」「このケースは、どのような対応が良かったか。」など、皆が自分事として事例を捉え直す機会を設け、指導力向上に務めてきたことが成果となったと感じる。

これらは、3年間の学びのほんの数例でしかないが、様々な教育活動や実践を通して日々成長を続ける天津日本人学校の子供達の姿から多くのことを学ばせていただいた。本当に感謝している。

在外教育施設派遣教員としての経験は、兵庫県が求める「学び続ける教師」や「ミドルリーダー育成」という私達の世代にまさに求められている力そのものであった。天津日本人学校という組織での経験をミドルリーダーとして在籍校の校長・教頭の学校運営ビジョンを自ら解釈し、自分の言葉で各教職員に伝える「ミドル・アップダウン・マネジメント」を心がけて活かしていこうと強く思う。そして、今後も研鑽を積み上げ、海外で暮らす日本の子ども達のため、さらには兵庫県の国際理解教育の推進の力になれるように努めていきたい。

サウジアラビア王国 ジッダ日本人学校に赴任して

相生市立双葉小学校 竹山 森汰郎

1 赴任地（サウジアラビア王国及びジッダ）の概観

アラビア半島の大部分を占める、人口約3400万人の国である。国土面積は215万km²で日本の約6倍ある。国土の95%は荒涼たる砂漠や土漠が広がり、その地下には埋蔵量世界一の石油資源がある。そのためガソリンの値段は水と同じかそれよりも安い。灼熱の国と言われるが農業も盛んで、小麦の自給率が100%を超え、ナツメヤシ（デーツ）も輸出されている。

また、イスラム教の2大聖地メッカとマディーナのある、全国民がイスラム教徒の国である。1日5回のサラ（お祈り）の時間には、町中にアザーン（お祈りを告げる放送）が流れ、全ての店が一時閉まる。アルコールや豚肉が禁止され、女性はアバヤという黒い衣装を着用しなければならず、周辺のイスラム諸国よりも戒律が厳しい。最近まで観光ビザが下りず、「世界一入国の難しい国」と言われていた。しかし、ここ数年、ムハンマド皇太子が中心となり開放政策や脱石油政策「ビジョン2030」が進められ、映画館の解禁、サウジ女性運転の解禁、各地でイベントを開催するなど、女性の社会進出、エンターテインメントに力を入れ始めた。昨年観光ビザの発行が解禁され、観光にも力を入れ外貨の獲得を目指している。その反面、今まで税金のなかった市民に5%の付加価値税がかかり、さらに外国人は高額な人頭税がかけられるようになったり、「サウダイゼーション」と呼ばれる国民雇用促進計画が強く推し進められたりすることにより、外国人労働者は住みにくい環境にかわり、流出が進んできている。

日本とは古くから結びつきが強く、石油を輸出する代わりに、自動車や石油プラント、重機、男性の民族衣装トーブなどの製品を多く輸入している。海水から真水にかえる海水淡水化の技術も日本の企業がかかわっており、市民の生活を支えている。映画や漫画、アニメといったエンターテインメントや食文化に興味のあるサウジ人も多く親日的で、日本人にとっても好意的な印象を持っている。

ジッダはアラビア半島の西部、ダイビングの名所でもある紅海に面している、人口約400万人のサウジアラビア第2の都市である。メッカ、マディーナの玄関口として栄え、毎年約200万人のイスラム教徒の巡礼者が訪れる。年間平均気温は30度を超え、5月から40度を超える日もあり、日中は1年中半そでで過ごすことができる。世界一高い噴水・国旗掲揚塔や、芸術性豊かな巨大モニュメントの数々、至る所にある美しいモスクなど、世界に誇るものも多い。完成すれば1000m超えのジッダタワーも建設中である。2014年には「オールドジッダ」という歴史地区が世界遺産に登録された。ジッダに住む約100名の日本人のほとんどはコンパウンドという外国人居住区に住んでいる。日本人会の行事やサークル活動が盛んで交流の機会も多く、お互いに助け合い支え合いながら生活している。



2 ジッダ日本人学校の概要

在サウジアラビア日本国大使館附属として、昭和50（1975）年10月1日に開校した歴史ある学校である。開校当初は約60名の児童生徒数があり、多いときには80名以上在籍していた。しかし、1990年の湾岸戦争の際は児童生徒が1人になった時もあった。この頃から児童生徒数が減少し、一時は「世界一小さい日本人学校」と呼ばれていた。近年では約10名前後の児童生徒数で推移している。

3 特色ある教育実践

（1）外国語教育

通常の外国語（活動）の授業に加え、小学部は週4時間、中学部は2時間の英会話と、週1時間のアラビア語の学習を行っており、豊富な時間をかけて学習を進めている。小学部の英会話は、HOP、STEP、JUMPの3つのクラスを設け、希望制で個々の能力に合わせて学習を行っている。英語検定は年2回準会場校を設け、令和元年度は全児童生徒が受験し、小4の児童が2級に合格するなど、ほとんどの児童生徒が合格した。また、トルコ校、ブリティッシュ校との交流、校外学習、現地理解教育など活動で英語を使う機会が多く、生活の中で活かせる取り組みも充実している。学習発表会での英語劇も本校の伝統である。



（2）現地理解教育（サウジタイム）

「サウジアラビアのひと・もの・こと」について学習する目的で、平成26年よりスタートした。衣

食住や文化、宗教などのテーマを、児童生徒の興味に合わせ主体的に対話的に体験しながら学ぶことで、サウジアラビアの良さを知るとともに、異文化の理解、日本の良さを改めて知ることができるなど深い学びにつながっている。学習発表会では、日本人会や取材に協力してくれた方々を招き、工夫を凝らした発表を披露している。私は3年間で特産のデザート、サウジのアニメ事情、サウジにある商品を辿ることをテーマに現地理解を深めていった。



(3) 複式・全校授業

学級は全学級複式学級で、基本は複式授業、体育は全校の合同授業を行っている。小規模校の利点を活かし、きめ細やかな指導を実現し、基礎基本の定着、能力に応じた教育活動を展開している。また、朝の会や集会、行事などで多くの発表の場を確保し、表現力の向上につなげている。授業は異学年が同じ教室にいることを活かす学習活動を進めている。上学年へのあこがれや模倣、下学年への思いやりや手本となる考え方が自然に育っている。

(4) 日本の伝統を大切にした取り組み

本校は、和楽器の演奏、伝統行事、お手玉やかるたなどの昔遊びを行っている。和太鼓や三線は、毎年トルコ校との交流会や日本人会の行事、サウジ政府のイベントなどで披露している。また、「こいのぼり集会」「七夕集会」「豆まき集会」などの日本の文化的行事を児童生徒会が企画・運営し、毎年楽しんでいる。日本の文化に親しみを持ち、そのよさを実感している子どもたちの姿が見ることができた。

(5) 水泳・海の遠足・スクールステイ

5月から気温が40度を超えるジッダでは、屋外での体育は冬に限られる。本校では水泳を通じて体力の向上を図っている。20m泳げなかった子どもが、高学年になると4泳法泳げる児童も出てくる。水泳大会では、日本人会の方々も参加し運動会以上に盛り上がっている。また、きれいな紅海でシュノーケリングを楽しむ「海の遠足」や、児童生徒会企画で実施する1泊2日のスクールステイは伝統があり、児童生徒の人気行事である。



4 成果（派遣教員として得たもの）

(1) たくさんの人との出会いと学び

派遣期間中、駐在する日本人やサウジ人初め、フィリピン、パキスタン、インド、アメリカ、イエメン、アフリカ諸国など、様々な国の人たちと交流を深めることができた。駐在の日本人からは仕事に対する構えや人生経験を、外国人からはその国の文化や考え方に触れることができた。

(2) 環境の違い・文化の違いからの学び

理科室にアルコールや実験器具がない、暑すぎて植物が育たない、国のルールがコロコロ変わる、サウジ人はよく遅刻やドタキャンする…など、日本では当たり前であることが海外では通じないことが多い。初めは不満に感じたこともあったが、いつの間にかそれを楽しめるようになった。今回のコロナ対応も含め、どう工夫するか、どう乗り越えようか、どう生かそうかと柔軟に考えられるようになった。ハプニングやトラブルにも冷静に対応できる、懐の深さが増したように思う。外国と日本は気候や宗教、文化が違う。派遣教員の考え方や仕事の仕方も一人一人違う。1つのスタイルに執着せず、いいところを利用したり、逆手にとって活かしたりする視野の広さや対応力が、海外ではより求められる。また、日本人学校では、派遣教員全員で児童生徒一人一人を見守ってきた。各教職員の長所を活かしながらチームとなって、子どもを育てていくことが大切だと改めて感じた。

(3) 複式学級・複式授業の経験

複式学級担任・複式授業を経験できたことが大きい。話し合い活動中心の学習展開を行い、話型や形式にとらわれず、友だち同士のおしゃべりに近い話し合いの方が活発な意見交換ができ、知識の定着や深い学びにつながった。一方向・双方向より複方向の動きのある学習展開を日本でも行っていきたい。

たくさん人との出会いや環境・文化の違いの理解、実情に応じて柔軟な学習指導ができれば、日本以上の教育活動が行えることを実感できた。自分の資質や経験が、海外の日本人の子どもたちに生かせることが、こんな幸せなことなんだと感じた、充実した3年間であった。

サンタ・エレナ小学校に赴任して
～算数学力の定着のために～

宝塚市立美座小学校 山口 敦司

1. 任地の概観

パラグアイは南アメリカにある内陸国である。日系人が約1万人暮らしており、2019年には日本との外交樹立100周年を迎えるなど、日本との深い繋がりがある。配属先の小学校があるサンタ・エレナ市は、首都アスンシオンから東へ約100Kmのところにある。人口約7000人の小さな町であるが、市長や市民の努力の結果、2020年にはパラグアイで2番目にきれいな町という評価を受けた。各家庭で鶏を育て、道には牛が歩いているのどかな町である。道端ですれ違う人と挨拶を交わす習慣があり、人との繋がりを感じられる温かい雰囲気がある。公用語はスペイン語とグアラニー語で、サンタ・エレナ市のような地方の町では主にグアラニー語が話される。

2. 配属先の概要

配属先のサンタ・エレナ小学校は、教会の敷地内にあるカトリック系の学校で、全校生104名（2020年3月時点）、教職員11名の小規模校である。二部制をとっており、7時～11時が3・4才児と4年生～6年生、13時～17時が就学前～小学3年生の児童が学んでいる。私は2代目のボランティアであり、要請内容は、主に算数の基礎学力定着と授業改善であった。5才児から6年生の算数の授業で関わった。



サンタ・エレナ小学校

3. ボランティアとしての活動

(1) MaPara (マパラ) の全国展開

MaPara (マパラ) とは、Matemática para Paraguay (パラグアイのための算数) という意味である。日本の算数指導書を元に、コルディジェラ県の算数部会の先生と当時の JICA ボランティアが作ったパラグアイの先生向けの指導書である。児童用の問題集 4D (クアトロデー) も作成された。2019年度から教育省が関わり急展開した。上記の算数部会の先生とボランティア数名とともに研修会を担当し、全国約20カ所2500名以上の教育関係者に、1年生の内容の研修を行った。日本の教育に大変関心がある教育省副大臣ロベルト・カノ氏と、日本とパラグアイの教育について話し合う機会やプレゼンをする機会をいただいた。2020年度からは、教育省がカリキュラムに沿って内容を追加し、全国公立小学校に“MaPara” (マパラ) として、教師には指導書、児童には問題集が配布された。2018年に発表された PISA for Development の結果において、数学の最低レベルに達した生徒が僅か8.3%のパラグアイでは、日本式の算数指導法が分かりやすいと好評を得ている。地球の反対側で日本の指導法を伝えることが一つの大きな活動であった。



教育省副大臣と2時間にわたる話し合い

(2) 基礎学力定着のために

① 学習規律の改善

パラグアイには、学級経営という考え方が存在しない。勤務校では、児童は教師の話をあまり聞くこ

とができなかった。そして、発表する場面では収集がつかないほどになる。「聞く」ことができるようになれば、少なくとも学習理解に変化があると考えていた。目を見て聞くということは、非常に効果があったと現地の先生が話してくれた。「話す」ことにおいては、「手を挙げる」ことで、低学年では落ち着いて意見を言えるようになった。日本で当たり前に行われていることを現地に合う形で継続した。その結果、1年が経過するころには授業中の空気が一変し、学習環境が整っていった。



1年生の授業の様子

② 授業改善

並行して、授業の改善に取り組んだ。卒業前の児童においても、多くが算数の基礎を理解していないことが分かった。教師主導の単調な授業を脱却するために、「教材を使うこと」「ゲーム性を取り入れること」「児童とともに板書を作ること」など工夫を取り入れた。参加型の授業となったため、子どもたちは黒板に書いたり、発表したりすることが楽しくなり、学習意欲が向上した。そして、授業中の笑顔が増えた。手作りの教材を使うことで、子どもたちは視覚的にも理解しやすくなり、教師の説明を集中して聞けるようになった。また、学力が定着しない要因として、練習が少なかったことも挙げられる。そのため、練習問題やミニテストを繰り返し行った。

これらを継続した結果、計算、図形、量、文章問題を含めた学年末のテストにおいて、全ての学年で60点以下の割合が減少した。6年生においては、学年の最初は90%の児童が60点以下だったが、学年末には10%まで激減した。この改善を参考に、関連校4校にも巡回し、本校とともに研究授業と研修会を毎月行い、町全体の教育力の向上に向けて取り組んだ。



5年生の円の面積の授業の様子

(3) その他の活動

- ・通常学級におけるユニバーサルデザイン研修会の実施（全国展開に先駆けて教育省からの依頼）
- ・JICA 東京の教師海外研修の先生の訪問受け入れ、JICA 関西の教師海外研修 OB の先生との授業
- ・美座小学校（在籍校）で行われた図工展をアレンジして実施
（図工展のモデルとなった絵本「白黒ロボットが見た夢」の作者三枝真紀氏が来校）
- ・組体操の実施（日本の全国組体操実践発表会での実践ビデオ発表5回 2018年度、2019年度）
- ・兵庫県高等学校中堅教諭等資質向上研修でのスカイプトーク（2018年度、2019年度）

4. 成果

現地の先生たちと対話を重ね、子どもたちが「分かる」授業を目指して取り組んだ。文化は違っても同じ教師として一つの方向に向かえたと思う。子どもや先生に変化が出てくる中で、教育の大切さについて改めて実感することができた。子どもたちは、家の仕事を手伝いながらも、のびのびと子どもらしく育っているのが印象的だった。日常生活においては、ホームステイをする中でパラグアイ人の「生きる力」を目の当たりにした。停電や水が止まることがあっても慌てることはない。非常に嬉しい。また、「豊かさ」「幸せ」とは何かという問いに、「自然」「家族」「人との繋がり」というシンプルな答えが返ってくる。何か大切なものに気付かされた。今後はパラグアイでの経験を還元していくとともに、世界で起こっていることについて、未来の社会を担う子どもたちと一緒に考えていきたいと思う。

ブエノスアイレス日本人学校に赴任して

神戸市立平野中学校 岸本 紗矢子

1. 赴任地（アルゼンチン）の概観

アルゼンチンはちょうど日本の真裏にあたる南アメリカ南部に位置し、ウルグアイ、チリ、ボリビア、ブラジル、パラグアイと国境を接している。国土は世界第8位と非常に広大で、国内にはイグアスの滝をはじめ、ペリトモレノ氷河やサリーナスグランデス（塩湖）、南米最高峰であるアコンカグア等、果てしない大自然が広がっている。

一方、日本人学校もある首都・ブエノスアイレスは「南米のパリ」とも形容され、美しい街並みを形成している。19世紀半ばに国家の西欧化を望んだ自由主義者が勝利しヨーロッパ移民が大量導入されたことで、現在の国民はヨーロッパ系が85%とその大部分を占める。公用語はスペイン語である。

アルゼンチンと日本の交流の歴史は古く、2018年には外交関係樹立120周年を迎えた。19世紀に日本からの移民（その多くは沖縄と鹿児島から）も増え、現在ではブエノスアイレス・ミシオネス州・メンドーサ州を中心に、3万人の日系アルゼンチン人が暮らしている。

2. ブエノスアイレス日本人学校の概要

ブエノスアイレス日本人学校は、1968（昭和43）年に大使館附属日本人学校として開校した。2度の校舎移転を経て、現在はベルグラノー地区に校舎（民家を改築したもの）を構え、アルゼンチン唯一の日本人学校としている。一昨年（2018年）には開校50周年を迎えた。

在籍児童生徒数は27人（2019年4月時点）で、小学1年生から中学3年生までの児童生徒が学んでいる。学校教育目標を「互いを認め



合い（協力・尊重） 夢を育み（主体性） 進んで行動できる（積極性・自主性） 児童生徒の育成 ～未来に向かって「志」をもととする児童生徒を育む教育～と定め、小中一貫校として児童生徒会を中心に、学年の垣根なく関わり合える活動を設定している。

3. 特色ある教育実践

（1）現地校交流

本校は、ブエノスアイレス市内にある「ブエノスアイレス日亜学院（以下、日亜学院）」という、学校カリキュラムの中に日本語教育を取り入れている現地校と年に2回（1月と3月）の交流を行っている。1回目は日亜学院の児童生徒（各学年約2名ずつ、日亜学院側で選出）が本校に来校、2回目は本校の児童生徒（希望者全員）が日亜学院へ出向き交流活動を行う。

交流期間中のそれぞれの1週間は、互いに日本/アルゼンチンの文化を肌で感じながら授業や行事をはじめとする学校生活を体験することとなる。どちらの児童生徒にとっても近距離で異文化に触れることができる好機となっている。また、各学年単位で English 校との文化交流も定期的に行っている。

(2) ゲストティーチャー

・タンゴ鑑賞会

アルゼンチン民族音楽の一つ「タンゴ」。その大長志野さん率いるタンゴ四重奏団, Barrio Shino を招き、本校講堂で鑑賞会を行っている。

・天体観測会

国立天文台チリ観測所 (ALMA 望遠鏡) より水野範和教授を招き、宇宙についての基本的な知識から最新情報までご講義をいただいている。また、日没後は校舎屋上へ上がり、水野教授解説の元、天体観測会も行っている。

・JICA ボランティアによる出前授業

不定期ではあるが、毎年折に触れて JICA ボランティアの方々を招き、要請分野に基づいた出前授業をお願いしている (これまでに社会福祉, 野球, 剣道)。

(3) 修学旅行

行き先は基本的に3年毎のルーティンを組み (イグアスの滝とグアラニー族/コスキンのfolklore と第2の都市コルドバ/ガウチョ), 現地事情を活かし学習できる内容としている。また各プログラムには文化の受信と発信をする場として、現地校との交流活動を入れている。



4. 成果 (派遣教員として得たもの)

日本との時差は12時間、日本が正月を迎えるころは真夏、北極星の代わりに南十字星が見え、日本では見たことのない野鳥が飛び、地平線まで見えるパンパが広がる南米・アルゼンチン——自分にとっては全くのフロンティアだったその地で3年間暮らす中で、特に大きく変わったことは、地球の捉え方だった。途轍もなく規模が大きく、そこに住んでいながらもどこかつながりを感じにくかった「地球」という存在が、とても身近に感じられるようになった。それは、常に日本をはじめ、様々な国で暮らす大切な人々に思いを馳せていたからではないかと思う。世界地図の上にポン、ポン、ポンと載っていた国が「朝のリレー」をしながら、ひとつ・ひとつ・ひとつ、とつながれていくような感覚も得た。

ブエノスアイレスという特異な地で、同じ空気を吸い、同じ時を過ごした日本人学校の児童生徒、保護者、教職員。日本から遠く離れたアルゼンチンで「日本」という共通項は、私たちに強いつながり感と日本人として教育活動を続けようとする原動力をもたらした。3年間の研修で得た様々な発見を特別なものとせず、これからの日常に活用していきたい。

1. 赴任地の概要

エクアドル共和国は、南米大陸のコロンビアとペルーに挟まれた赤道直下の小さな国で、国土は日本の4分の3、人口は10分の1ほどである。アンデス山脈が国を縦にはしり、この山岳地帯は「シエラ」と呼ばれ一年を通して過ごしやすく、そのアンデス山脈を挟み太平洋側は「コスタ」という温暖な地域、反対側は「オリエンテ」と呼ばれる高温多湿のジャングル地帯となっている。この3つに観光地として有名なガラパゴス諸島を含め、エクアドルは4つの気候帯からなる。この多様な気候のため、一つの国であっても文化や風習は地域によって大きく違い、生物の多様性も大変豊かである。

エクアドルはJICAボランティアが派遣されているものの、中進国に属し、都市部での生活は日本と比べ全く不自由することはない。およそ7割の人々がメステイソと呼ばれる白人と先住民の混血で、インディヘナやアマゾンの少数民族などの先住民は合わせても1割弱である。そして、このような先住民の人々の暮らしは昔ながらの質素なもので、貧困家庭も多く、エクアドルは文化・風習、生態系も多様であるが、国の中で大きな経済格差があり、人々の暮らしの差も大変大きい国である。



2. エクアドルの教育

私が感じたエクアドルと日本の学校の大きな違いは、学校で最も大切なのは児童生徒か教師か、というものである。日本の学校では、児童生徒の教育活動が最も重要視される。もちろんエクアドルもそうだが、現実には教師の都合で児童生徒が放っておかれることが多々ある。会議のため児童生徒は放っておかれる、携帯電話は私用、公用問わず優先されるなど、日本人にとっては受け入れがたいことが多くある。しかし、これもまた都市と農村、私立と公立で差があり、都市、私立では規律があり、質の高い教育活動が行われているが、農村、公立では規律も曖昧で教師の意識が低いことがよくある。

学校の構成は、3歳からイニシアルという幼稚園のようなものがある。次に5歳から15歳まで10年間で小中一貫教育となっており、この期間が義務教育である。そして3年間高等学校、その後大学となる。全て無償だが、私立と公立では学力の差もあり、日本と同様、保護者の経済格差が児童生徒の学力の差を作っている。

また教育省の権限が大変強く、教育活動においての学校や教員の自由度は少ないように感じた。成績については、学期末の試験や普段の宿題によってつけられるため、家で保護者が宿題をやっていることも多々あるようだった。私の勤務していた特別支援学校では3歳児から学期末に筆記試験（内容は色ぬりなど）があり、これも日本人にとっては大変不思議な光景だった。

3. 赴任校の概要

カルロス・ガルバイ特別支援学校はチンボラソ県リオバンバ市にある生徒およそ400人が通う大規模な公立の特別支援学校である。チンボラソ県はインディヘナの人々が多いが、リオバンバ市周辺のインディヘナの住む小さな村には特別支援学校がない。そのため遠くから児童生徒が来ており、インディヘナの子どもたちが6割を占めていた。また、このような児童生徒たちの中には、片道2時間以上かけてくる子どももあり、そのような児童生徒は曜日を決めての登校や遅刻、早退が認められている。本校にはイニシアル1から高等部までがあるが、その他にも早期療育事業や地域支援事業なども行なっている。職員は理学療法、作業療法士、言語聴覚士、心理士、歯科医、事務職員などを含め60人ほどであるが、教員の中には教員免許を持たない人も数人いた。各クラス1人担任でイニシアル



ルは教師1人で幼児5、6人ほどのクラスであったが、補助の職員が入る。しかし小学部からはクラスに10人以上の児童生徒がいることもあり、1人担任では十分に教育活動が行えない状況も多かった。重複障害のクラスでも、6、7人を1人の担任で受け持っており、避難訓練時は事前に準

備しているためなんとかなるが、実際に大きな地震などがあつた際にはどうなるかわからない。このように教員が少なく十分な学習が行えない状況もあるが、多くの教員が愛情を持って児童生徒に接し、できる限りの教育活動を行おうと日々忙しく働き、努力している。

4. 活動内容

カルロス・ガルバイ特別支援学校から JICA に出された要請は、

- ① 一般の教育カリキュラムを元にした、障害児の実態に合わせた教育計画のたて方についての助言。
- ② 様々な障害をもつ児童生徒に対する授業の補助と改善についての助言。
- ③ 教材教具の紹介と自作方法の指導。
- ④ 授業・学習環境の改善例の紹介など、講習会の実施。

というもので、①以外は全て行なつたが効果があつたとは言い難い。本校は私でボランティアの受け入れは3人目だが、職員が多く入れ替わつた上に情報の共有がないため、まず JICA ボランティアの意味が理解されていなかった。当たり前であるが、よく知らない国（エクアドルでは日本は中国の一部だと思われることも多い）の言葉もうまく喋れない外国人の助言や提案は受け入れられにくく、なかなか私が意見を出せる状況ではなかつた。しかし、そのような中でも初めの3ヶ月間はクラスを固定して担任の補助をし、その後様々なクラスを見て回り、校長に改善点などを書類で提出した。そしてまた元のクラスで教室環境の改善や全職員への研修などを行いながら、防災教育や体育、理学療法士、作業療法士など他のボランティアを招き、職員研修や児童生徒への直接指導を行なつてもらつた。任期後半は、高等部の作業学習で低学年用の食堂の机の制作をしたり、教材教具の研修や学部ごとに発達年齢にあわせた研修などを行つたりし、最後には校長の依頼で特別支援教育のマニュアルを制作した。また4月より1年間、日本の勤務校とアートマイル国際共同学習に参加し、交流学习、壁画制作を行つた。

校外の活動としては、大学の教育学部で授業を行つたり、キト市の算数教育隊員の企画した教員への研修会で特別支援教育の研修を行つたりした。

そして世界の多様性を日本の子どもたちに伝えたいと思い、日本の勤務校と自分の母校の小学校に月に一回通信を送り、母校の5、6年生とは Skype によるテレビ会議を行つた。



5. 成果（青年海外協力隊派遣教員として得たもの）

今回、青年海外協力隊としてエクアドルに派遣され、私がエクアドルのためにできたことはほぼ何もなかつたように感じる。しかし、これから私を日本を含めた世界の子どもたちのためにできることは、青年海外協力隊の経験により大きく増したと感じている。多くの協力隊員は、派遣された国を自分の故郷のように感じ、私もエクアドルのこと、エクアドルの人々のことを、近所の人のお話をするように話す。この感覚というのは、これからの日本にとって大切なものだと思う。日本は島国で、接する国はなく、隣人が外国人のことはごく稀であつた。しかし、すでに日本には多くの外国人が住み、日本の中に異文化が存在するようになり、私たちはそこで生活しなければならなくなつた。このような社会では、外国人を自分たちとは違う異文化を持つ人として接するのではなく、その異文化や習慣ごと「その人」として受け入れられる力が必要なのではないかと思う。協力隊員たちは他の人より少し世界を小さく捉え、文化や風習を超えて様々な人をそのまま受け入れることのできる人が多いように思う。よく「青年海外協力隊に行つた教員は学校現場で浮く」と言われる。しかし教育現場では外国人労働者の増加に合わせ、外国人児童生徒が増加し、多くの新しい課題を抱えるようになってきた。だからこそ教育現場は教員にかかわらず協力隊員をもっと利用できるのではないかと、思う。このように日本の教育を俯瞰して、いろいろな見方、考えを持てるようになったことが青年海外協力隊に行つた一番大きな成果ではないかと考える。現在、特別支援の対象となる外国人児童生徒の割合が日本人児童生徒の2倍以上になる地域が多くある。これが意味するところは、外国人児童生徒が日本の中で十分な教育を受けられない環境におかれていることがある、ということである。このような問題に対して実際自分にできることは、今はまだわからない。しかし今までの教員としての経験と協力隊で得た経験とを活かし、自分の専門性をさらに高めながら、障害のある児童生徒だけでなく外国人児童生徒や健常児も含め、すべての子どもたちが生き生きと学校で学び、生活できるためにさらに努力していきたい。

1, デュッセルドルフ（ドイツ）の概要

デュッセルドルフは、ドイツ西部にある大都市で、人口約63万、日本人約1万人、日本人の割合は約15%、ドイツ最大の都市である。...

2, デュッセルドルフ日本人学校の概要

デュッセルドルフ日本人学校は、1971年に開校した。児童数は約100名、男女半々。...

3, 特色ある教育実践

本校の特色は、国際交流の促進、異文化理解の育成、地域社会への貢献などにある。...

4, 成果（派遣教員として得たもの）

(1) 教科での取り組み
① 書くことへの指導
年々、自づから書く機会が増え、表現力が向上している。...

1 タイ王国の概観

タイ王国は、東南アジアの中心に位置し、国土面積は約 51 万 4 千平方キロメートルで、日本の約 1.4 倍である。ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接している。人口は、約 6,900 万人で、民族は、タイ族が約 85%、中華系が 10%、他にモン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が生活している。山岳部にはそれぞれの文化や言語をもったモン族、カレン族といった少数民族が暮らしている。公用語は、タイ語で、日常会話では地方によって方言がある。宗教は、仏教徒が 94% を占め、イスラム教徒が 5% となっている。信仰心が厚く、至る所に寺院や祠があり、老若男女問わず、合掌する姿をよく見かける。寺院等にお布施をするだけでなく、他者を助けたり、寄付をしたり、電車の席を子どもやご年配の方々に譲ったりするなど、「タンブン（徳を積む）」という観念が人々の生活や行動に大きく関わっている。首都は、バンコクで、タイ語名では、クルンテープ・マハーナコーン…（実は、かなり長い正式名称がある）で、「天使の都」という意味を持つ。



過去、どこの国からも支配されることなく、独自の発展を遂げてきた。2014 年には、反政府デモの拡大とクーデターが発生するなど情勢不安もあったが、2019 年にはプラユット（民政）新政権が正式に発足し、民政復帰を果たした。また、2016 年 10 月 13 日、70 年間の長きに亘りタイを統治し、国民にとって多大なる尊敬と敬愛の対象であり、タイの発展を主導してこられたプミポン国王が崩御された。タイ政府と同国民はプミポン前国王の崩御に際し、国を挙げて悼み、約一年間の服喪期間が設けられるなど、どれだけ大きな存在だったのかがよくわかる。2017 年には、プミポン前国王の火葬式が、2019 年には、ワチラロンコン国王の戴冠式が国を挙げて盛大に執り行われた。

タイにおける在留邦人は 72,754 人（2017 年 10 月）、タイへの日本人渡航者は約 164 万人（2018 年）となっている。日タイ両国は 600 年にわたる交流の歴史を持ち、伝統的に友好関係を維持している。長年の両国の皇室・王室間の親密な関係を基礎に、政治、経済、文化等幅広い面で良好な関係を築き、人的な交流も活発である。

2 バンコク日本人学校（泰日協会学校バンコク校）の概要

本校は、1926 年（大正 15 年）創立の盤谷日本尋常小学校を前身とし、世界の中で最も長い歴史をもつ日本人学校である。日タイの経済発展に伴い、児童生徒数が増加し、「泰日協会」が母体となり、1974 年（昭和 49 年）にタイ国私立学校法に基づき、タイ国政府から正式に義務教育学校として許可を得た。そのため、正式名称は「泰日協会学校」となっている。



2009 年（平成 24 年）にはシラチャ校（シラチャ日本人学校）が開校した。バンコク日本人学校は、小中併設校であり、全校児童生徒数が約 2,600 人を超え、教職員数も約 200 名という、世界有数の規模を誇る日本人学校である。

2020 年度 4 月からは、新しく建設された 6 号棟を、中学部の校舎として使用することとなり、これまで課題であった教室数の不足が解消され、少人数クラスでの授業などに有効に活用されることが期待される。

3 特色ある教育実践

（1）現地校との交流学習会

中学部 1 年生では、毎年チュラロンコン大学附属中学校との交流学習会を行っている。チュラロンコン大学は、タイ国内で最も古く権威のある国立大学であり、その附属中学校と、隔年でゲスト校とホスト校を入れ替えて交流学習会を行っている。ゲスト校として訪問した際には、日本語を話し、使いこなしている生徒が多くいることに驚いた。タイ語を教えてもらったり、タイ舞踊を見せてもらったりした。ホスト校として、書道やスポーツだけでなく、数学や美術などの学習なども行った。同年代の現地の学生との交流を通して、現地理解を深める機会となった。

(2) ODA学習

ODAの円借款により、日本はタイに様々な援助をしている。スワンナプーム国際空港をはじめ、浄水場や橋や鉄道など、タイの発展に大きく貢献してきた。また、青年海外協力隊のボランティアとして実際に活動し、教育や技術の面で支援をしていることもある。このような、タイと日本の歴史やつながりを知り、実際にその場へ赴き、国際貢献について考えることができた。

(3) 職場体験学習

中学部2年生では、キャリア教育の一環として、総合的な学習の時間を中心に働くことの意義を学んだ。現地法人の方々働く場へ赴き、実際の仕事を体験したり、タイ人とともに協力したりする中で、海外で働くからこそそのやりがいや苦勞を知ることができた。

(4) シンガポール修学旅行

本校では、中学部2年生で修学旅行に行く。かつては、タイ国内のスコタイに行っていたが、2012年から現在のシンガポールになった。事前に、同じ東南アジアであるシンガポールという国について、歴史や文化、教育や経済、環境などについて調べ、現地へ赴き、実際に見て、聞いて、感じることで、異文化理解につながった。現地の大学生とともに班別自主研修を行い、英語でコミュニケーションを図りながら活動することは、生徒にとって日頃の学習の成果を発揮する場面となり、今後の学習への意欲や自信につながった。



(5) 現地理解教育

① タイ現地校での研修

毎年、夏期休業中にタイ各地の現地校へ赴き、タイ人の児童生徒に日本人学校の教師が授業を行ってきた。北部では、山岳少数民族が通う小さな学校、東北部では、教育研究校に指定されている学校、南部ではイスラム教系の学校と、地域によって学校の施設設備や、教師や生徒の雰囲気も大きく異なっていることを肌で感じた。一方で、言葉がうまく通じなくても、子どもたちの学びたい、知りたいという意欲や、できた、わかったと喜ぶ姿を目の当たりにし、教育の原点を思い出す機会を得ることができた。

② スラムの子どもたちとの関わり

バンコクには、タイ最大とも言われるクロントゥーイスラムがある。そこには、さまざまな支援がされており、その一つであるシーカー・アジア財団の活動に何度か参加した。実際にスラムを歩いたり、財団の方の話を伺ったりした。発展めざましい華やかなバンコクの町並みの一方、依然として貧困や薬物と隣りあわせで生活している人がいる。格差社会が日本以上に顕著な現実がある。貧困の差は、教育の差となって表れ、進学できない者は、安定した職に就けず、結果、低賃金や不安定な収入しか得られないといった負の連鎖を生む。その連鎖を断ち切るのは、「質の高い教育」という話を聞いた。日本でも、問題にされることではあるが、改めて考えさせられた。

4 成果

初めてのタイでの生活は、想像していた以上にすばらしいものであった。タイ人の優しさ、温かさ、そして、あらゆる場面で感じられる「マイペンライ（だいじょうぶ）」の精神は、私の癒やしとなり、今後の人生で大切にしていきたいと思うことばかりであった。また、タイで暮らす子どもたち、ともに働く全国各地から集まった先生方、現地のスタッフやNETの先生方、よく行くお店の方々…多くの人との出会いや経験は、決して日本には得られないものばかりであった。

一方、本校は、世界有数の大規模校であるがゆえに、教育に対する考えや価値観、経験も大きく異なる教員集団が、一枚岩となって教育活動を進める難しさも実感した。しかし、その難しさの中で、私を救ってくれたのも周りの先生方であった、ともに悩み、葛藤しながらも、「子どもたちのために」を合い言葉に、一緒に乗り越えようとしてくれる仲間存在はとても大きかった。今後、ますます変化していく社会を生き抜く子どもたちのために、「教育」は重要な役割を持つ。また、教師に対する期待も大きい。だからこそ、一人ではなく、「チーム学年」「チーム学校」場合によっては、「チーム地域」で協働して、教育を行っていくことが大切だと思う。

最後に、このような機会を与えていただいたことに感謝し、この貴重な経験を今後の教育に生かしていきたい。

1 赴任地の概観

タイ王国は東南アジアの中心に位置し、東方にはカンボジア、北方にラオス、西方にミャンマーが位置する。面積は、日本の1,4倍。首都はバンコク。人口は日本の半分約6800万人である。在留邦人数は約7万人（全世界で6位、増加数は1位）である。日系企業は自動車産業が中心で、工場は輸出がしやすいバンコク東部に集中している。公用語はタイ語であるが、第二言語として英語が広く使われ、日本語や中国語なども話せる人が増えてきている。日本とタイ王国は600年以上にわたる交流関係がある。近年、高層ビルの建設、高速道路や地下鉄、スカイトレインの路線延長など、急速に発展している。

2 赴任校の概要

タイ王国の首都バンコクに位置する。大正15年(1926年)盤谷日本尋常小学校として設立し、世界最初の日本人学校である。戦争により学校を閉鎖したものの戦後開校し、昭和49年(1974年)泰日協会を設置者としてタイ国学校法に基づく私立学校として認可された。世界にある在外教育施設の中で、在籍児童生徒数が約2700名と一番多く、世界一大きな規模の日本人学校である。教職員及び学校に携わる人数は約220名になる。令和2年度より新しい校舎を含め6つの校舎になる。ほとんどの児童生徒はスクールバスで通学しているため、下校のバス発車時刻は厳守である。バンコクから東に位置するところに泰日協会学校シラチャ日本人学校がある。



3 特色ある教育実践

(1) グローバル人材育成

①国際交流学習～現地校交流～

各学年、毎年現地の学校の同学年と交流している。2年に1度、交流会場を交代している。派遣中の3年間で、相手校への訪問と、相手校を招待したときの両方の立場を経験させていただいた。やはり受け入れ校のほうが、事前準備に時間が多く必要であった。児童は、授業で学んだ相手校の言語や英語、そして身振り手振りで交流をし、楽しい時間を過ごしていた。児童だけではなく、教師もタイの先生たちと交流できる良い機会となった。

②健康な体づくり

年間平均気温29度と日本の8月頃の気候のため、年間を通して、毎週1回の水泳授業を実施している。日本からの編入児童は、最初、戸惑いや不安が大きいが、いつの間にか泳力も伸びていった。顔をつけられなかった児童が、児童本人の努力も大きいが、3学期には、楽しく泳ぐ姿が見られた。

③外国語教育の充実

1年生から、週に2～3時間のタイ語及び英語の授業が設定され、ネイティブの教師が指導する。英会話として聞く、話すことでのコミュニケーション能力の育成をしてきたが、2年前より英語として読む、書く活動を加えた授業を行っている。高学年では、能力に応じて2つのクラスに分け、学習を行っている。

④Edu-Port（日本型教育の発信）の推進



東京学芸大学及び文部科学省との連携、そして在タイ日本国大使館の協力を得て、年1～2回の公開授業の実施。派遣1年目の学年で取り組んだ算数科研究授業を日本型授業研究として、タイ教育関係者へ、同時通訳で公開した。授業後の研究協議会も公開した。タイの先生たちは、授業の様子を熱心に見られ、授業後の研究協議会では日本型授業を賞賛してくれた。

⑤キャリア教育～全校集会「ゆめ集会」～

様々な分野・世界で活躍する方を招き、講演などを通して将来について考える機会をもっている。自分の将来、夢について考える時間を設定し、文章にまとめる。学年代表として選ばれた児童は、全校集会「ゆめ集会」で自分の将来や夢について発表する。低学年から児童は、自分の将来を見つめ、そして友達の夢を知ることによって少しずつ自分の将来、未来を具体的にイメージしていた。

(2) 運動会

暑気には日中体感温度40度以上であるため、乾季に入った頃の11月に運動会が開催される。中学部も併設されているため中学部の体育祭が終わった後に、



小学部の運動場での練習が始まる。

各学年8～14クラスあり、児童数が多いため、運動場練習では、特に団体演技は、移動練習、場所の確認が主である。学年のリレーはなく、徒競走を行う。団体競技は、発達段階に応じて玉入れや綱引きなどが行われる。本番当日は、児童、保護者合わせて約1万人近くの人が集まるため、保護者はプログラムを見て、運動場観覧場所へ行き、交代で観覧するような形となる。演技は、スケールが大きいいため、かなり迫力があり、見応えがある。

(3) 宿泊的行事～チャーム臨海学校～

5年生は、2泊3日でチャーム臨海学校へ行く。メインは、海での遠泳である。そのため、5年生になるや否や週1回の水泳の時間を2回に増やし、プールで練習をした。児童は、お互い励まし合いながら練習に励んだ。まず、自分が泳ぎきること。次にペアの友達も一緒に泳ぎ切ること。そして、クラスみんなが泳ぎきることが目標となっていた。クラス全員が泳ぎ切った後、児童の顔は、目標を達成した笑みでいっぱいであった。学校からチャームまでの往復はバスである、10台のバスが常に連なるように1台のパトカーが誘導及び他の車を止めて、道を空けてくれていた。日本では考えられない光景であった。



(4) 約9万冊の蔵書がある図書館～読書指導～



新しくできた校舎にも図書館があり、バンコク日本人学校には図書館が2つある。図書館には約9万冊の本があり、種類も豊富である。また、各学級及び廊下にも本棚が置かれ、児童生徒はいつでも本を手にとって読める環境である。新書や読みたい本を図書館司書に伝え、購入してもらえ、学級児童数の本を購入していただき、集団読書に取り組んだ。本の作者からも手紙が届き、子供たちは驚きと喜びの表情で楽しく取り組めた。保護者からは、同じ本が児童数用意されていることに驚かれていたことや高学年になり本を借りてこない児童が本を借りてくるようになったこと、本を買ってほしいと言われたなど、うれしい言葉をもらった。読書が苦手な児童が読書に興味をもってくれたり、児童が図書館に足を運ぶ回数が増え、自分の読める本や読みたい本を見つけることができたり、次第に本となかよくなっている光景が見られた。

4 成果

バンコク日本人学校は、世界の日本人学校のなかで一番児童生徒数が多い学校であるため、校舎も多い。それらの理由から、いろいろな規則があり、不自由さを感じることもあった。現状や与えられた環境で、多人数に適用、対応していく策を教師同士で出し合い、話し合い、児童にとってベストな環境や状態であることを念頭に対応してきた。日本ではなかなか経験することのない大規模校での学校生活は、貴重な経験であった。学校敷地内は、日本の学校とほぼ変わらない雰囲気であるが、いつもタイのスタッフが児童の安全を見守ってくれていた。またスタッフだけではなく、タイの職員のお陰で我々教師は、児童への学習指導や保護者対応に専念することができた。そのため、タイのスタッフへの感謝を忘れずにしてきた。

教師は、日本全国から派遣されている。そのため、学習指導や教材研究、指導法について語り合う時間をもてた。また、タイ語を教えるタイの先生や英語を教えるネイティブイングリッシュティーチャーたちとも職員室で気さくに話すことができた。タイの先生からは、タイの文化や習慣などを教えていただくことができ、タイでの生活の手助けをしていただいたといっても過言ではない。英語の先生たちとは、英語で英語を教える授業や教材そして、各出身国の様子や教育の様子など語り合えた。

「ほほえみの国タイ」という言葉通り、タイの人たちは、誰に対しても笑顔で親切である。校外学習で児童を引率したときなど、タイの人の優しさを感じる場面が多々あった。言語が通じなくても他人を心配する、思いやる気持ちを感じた。

海外で生活するたびに、確信することがある。それは、言語が通じなくても様々なコミュニケーションの手段を使いながら、お互いを理解しようとする気持ちがあれば通じる。あきらめずに自分の思いを届けよう、伝えようという思いを持つこと。そして相手の言いたいことを理解しようという前向きな気持ちがあれば、言葉に頼ることなく分かり合える。言葉がわかれば尚更、深く相手を理解することもできるであろうが、言葉だけに頼らなくてもよいということである。

3年間で得たこと、経験したこと、そして出会った人たち、すべてにおいて感謝するとともに、それらは私の財産になった。最後に、今回、海外で生活し、働くという機会を与えてくださった方々にそして、日本からやバンコクで支えていただいた方々に、心から感謝している。ありがとうございました。

ブエノスアイレス日本人学校に赴任して

丹波市立柏原中学校 久保田 信

1, 赴任地の概観

アルゼンチン共和国は、南米ではブラジルに次いで2番目に面積が広く、世界全体でも8位の面積を誇る。人口は南米大陸で3番目に多い約4000万人で、そのほとんどが首都ブエノスアイレスとその周辺に集中している。南北に長い広大な国土は自然環境も多様である。北部は亜熱帯に属し、熱帯雨林が広がり、北西部のボリビアとの国境地帯は乾燥した高地が広がっている。南部（南緯40度以下）はパタゴニアと呼ばれており、広大な荒野、雄大な氷河が広がっている。経済面では、20世紀半ばまでは世界有数の富裕国であったが、第2次世界大戦後は次第に経済は低迷し、2002年には経済破綻（アルゼンチン通貨危機）を迎えるに至った。現在も経済の先行きは不透明な状態である。文化面では、タンゴに代表されるように芸術への関心も高く、劇場や美術館も多い。スポーツへの関心も高く、サッカー、テニス、マラソン等が市民に親しまれている。とりわけサッカーへの関心は高く、リーベル・プレートとボカ・ジュニアーズとの一戦は、スーペル・クラシコ（伝統の一戦）として親しまれている。

日系移民の方も多く生活している。アルゼンチンへの移住が始まった1899年から1941年までの戦前の約40年間における移住者数は、日本全体で約66万人に及ぶ。日系移民の人々は、主に洗濯業や花卉産業に従事しながら、アルゼンチン社会の近代化にうまく対応し、自分たちの能力を発揮し、社会に定着していった。

2, 赴任校の概要

ブエノスアイレス日本人学校は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレス市の北部、ベルグラノー地区にある。小学部と中学部を併設しており、児童生徒数は9学年合わせて30名（令和元年度末現在）の小規模校である。児童生徒の保護者は、日系企業や大使館の駐在員の子女が大多数で、数名ではあるが、現地在住の日系人の子女も在籍している。教職員は、校長以外に派遣教員7名、現地採用教員3名（アルゼンチン人2名、日本人1名）、事務職員1名で構成されている。また、その他警備会社による警備員が24時間体制で警備に当たっている。児童生徒は毎日PTAが2台のスクールバスで登下校している。



3, 特色ある教育実践

(1) 日亜学院との交流

日亜学院は、アルゼンチン政府に認可された学校でありながら、日本人らしい礼儀や道徳観を大切にしながら教育活動を行う私立学校である。設立当初は、日系人対象の学校であったが、今では、日系人だけでなく、様々な民族の生徒が通っている。ブエノスアイレス日本人学校との交流活動も盛んで、毎年1週間ずつお互いの学校に通う大規模な交流活動を行っている。

交流活動では、1週間相手校の通常の授業に参加する形を取り、受け入れ校の教員のみが授業を行う。日本人学校に日亜学院の児童生徒を受け入れる際は、通常の授業を平易な日本語とスペイン語を交えて授業を行う。子ども達は、一週間学校生活を共にする中で、共通の言語を探りながら、次第に自発的なコミュニケーションを出来るようになっていく。また、餅つきや節分の豆まきの実践を通して、日本文化を紹介する活動を行う。活動を通して、子ども達は実践的なコミュニケーション能力を育むと同時に、自国の文化を見つめる絶好の機会にもなっている。

(2) English 校との交流

English 校 (Buenos Aires English High School) は、日本人学校に隣接する私立の学校である。低学年 (1, 2年)・中学年 (3, 4年)・高学年 (5年以上) の3つのグループに分かれ、それぞれ本校で1回、相手校で1回の合計6回の交流を行っている。前述の日亜学院と違い、相手校の児童生徒は、日本語を全く学習していないため、スペイン語と英語を用いて交流する絶好の機会となっている。本校に招いての交流活動では日本文化の発信をテーマに活動を行った。高学年の交流では、折り鶴を被爆者佐々木貞子さんの千羽鶴のエピソードを交えて紹介し、日本人の平和への思いと共に文化発信を行った。また、中学生は毎年、英語落語を披露し、English 校の子ども達を楽しませている。

(3) エイサーの取り組み

アルゼンチンには多くの日系移民の方が生活しており、その中でも沖縄出身者が多いのが特徴的である。本校では、現地在住の沖縄出身移民の方を招いての交流の一環として、沖縄の舞踊エイサーの取り組みをしている。エイサーを通して、単に踊りを習うだけでなく、日系移民の方々の歴史や日系社会について学ぶ良い機会となっている。エイサーは運動会やファミリーデー、現地校との交流等で披露し、日本文化の発信の手段となっている。



4. 成果 ～日本人のアイデンティティを見つめる～

アルゼンチンに来て最も驚いたことの1つは、人々の対日感情が非常にいいという事である。私が日本人であるとわかると、多くの人々は、親しみを持って接してくれた。彼らの中に「日本人は礼儀正しく、誠実である。」という日本人像がしっかりと根付いていた。

アルゼンチンで3年間暮らす中で、そんな日本人像をこの国の人々に根付かせたのは、日系移民の方々に他ならないということ学んだ。1913年の夕刊紙「ラ・ラソン紙」で「ブエノスアイレスで急増する日本人召使い」という記事が紹介されている。その中で、「日本人は最高の条件で労働を提供してくれる。」「これほど勤勉で洞察力のある主人専属ボーイは未だかつていなかった。」と賞賛の記事を紹介している。この頃から、日本人の勤勉さが人々に受け入れられていいことがよくわかるエピソードである。ある日系人の方によると、アルゼンチンの人々は、「日本人は悪い商売をしない。卑怯な商売をしない。約束を守る。」と評価しているそうだ。

昨今の国際化、ボーダレス化が進んだ社会で、「日本人らしさ」という言葉を語ることが難しい時代であると思う。日本にも多様な民族の人々が、多様な文化のもと暮らしている。「日本人らしさ」という言葉をステレオタイプに使うことは慎重であるべきだと思う。しかし、私は、日本から遠く離れた地球の真反対に位置するアルゼンチンで、日系移民の方々が差別や貧困などの困難を乗り越え、日本人であるということを誇りに持ちながら、日々暮らしている姿に心動かされた。そして、日本人としてのアイデンティティについて自問をせずにはいられなかった。

何度もインタビューに応じてくれた日系2世の内間さんは、『「地球の反対側に、こういう日本人もいるんだよ。』って、日本の子ども達に伝えてくれたらうれしいな。』と話しておられた。私は、アルゼンチンの日系移民の方々の道のりについて、日本人としてのアイデンティティを見つめるための教材として整備し、活用したいと思う。私自身がそうだったように、日本人の多くは、アルゼンチンに日系移民の方々が多くいることを知らない。移民の方々について学ぶことで、日本人のアイデンティティについて見つめると共に、「日本人」や「日本」という枠組みをより大きな視野で捉えることが出来るようになると思う。そして、国際社会の中で、日本ができること、「日本人らしさ」ができることについて考えることができる子ども達を育む一助になりたいと思う。

ブラッセル日本人学校に赴任して

淡路市立多賀小学校 古川 英治

1 ベルギーの概観

ベルギーの国土は総面積3万平方kmと、日本の12分の1と小さな国ですが、東はドイツ、南東はルクセンブルク、南はフランス、北はオランダ、西は北海を隔ててイギリスと隣り合っており、これらの隣り合う国々の首都はすべて、ベルギーの首都ブリュッセルを中心として半径350kmほどの円の中に収まるという、西ヨーロッパの地理的な中心に位置している。高速道路や国際鉄道、飛行機等の交通機関も発達しており、他国との行き来も盛んであり、ブリュッセルにはEUの本部も置かれている。



ベルギーは、3つの共同体（それぞれオランダ語・ドイツ語・フランス語を話す人々）と、3つの地域（フランデレン地域・ブリュッセル首都地域・ワロン地域）が一定の自治権を持つ「国家」として存在し、その6つの国が王の下に連邦を形成している王国である。現在、オランダ語とフランス語が公用語となっている。

ベルギーの気候は温暖化の影響はあるものの、南東部の高原を除いては冬でも月平均気温は氷点下にならず、夏は日本のような蒸し蒸しする猛暑が続く事は少なく過ごし易い。日照時間は、夏至（16時間）と冬至（8時間）では大きな違いがある。治安については、ベルギー・ブリュッセルは、欧州主要国・都市の中でも比較的治安のよい国・都市の一つとされていますが、ここ数年各種犯罪や交通事故が増加傾向にある。

2 赴任校の概要

ブラッセル日本人学校は、1973年4月、補習校として開校し、1979年、全日制がスタート。昨年10月には補習開校45周年・全日制開校40周年記念式典が開催された。児童生徒数は300名あまりで、周囲の住宅環境に調和した3階建て赤レンガ造りの校舎(右写真)と、各種遊具、運動器具を備えた全天候用校庭をもつ。冬期の部活動を保障する夜間照明設備、スクールバス通学児童生徒の安全を確保するための駐車場スペース、学級園、観察地・池など、年ごとに学校として施設設備を整えてきた。



8月末の運動会は、日本人学校の一大行事である。会の進行などは、中学部生徒と小学部高学年児童が担当し、円滑に運営している。保護者等、多くの人々の大声援の中で、子どもたちはこの日までの練習の成果を発揮する。

この他にも、各種行事への児童生徒の取り組みには目を見張るものがある。明るい陽光に恵まれる1学期にはサマースクール、グリーンスクールといった行事を実施している。また、小・中学部の修学旅行や各種施設の見学、現地校の児童生徒との交流会を実施している。これらは、日ごろの語学学習の実践の場であり、国際理解を深める場でもある。

このような教育活動を円滑に推進するには、在ベルギー日本国大使館をはじめとする、ベルギー日本人会や邦人社会の十分な理解と強力な援助があるということはいままでもない。また、保護者と学校の円満な関係を維持するためのPTAの役割も極めて大きい。学年委員会は、学級・学年を取りま

とめ、文化委員会は、講演会、見学会などの企画・実施、図書委員会は、図書の整備・保護者向けの貸し出し、マロニエ祭委員会は、子どものためのお祭りである「マロニエ祭」の企画・運営を行っている。

3 特色ある教育実践

(1) 外国語授業〈英会話・仏会話〉

ブラッセル日本人学校は週5日制で水曜日のみ午前授業（中学部は火、木曜日7時間授業）である。外国語の授業があり、小学1，2年生は仏語必修、小学3年生は試行的ではあるが選択制の第1外国語・第2外国語制で英語と仏語の二か国語の学習を進めている。小学4年生から中学生までは英語か仏語のどちらか選択して受けることができる。それぞれの授業は能力別クラスで毎日20分、中学部は週4回（30分授業）行われる。

(2) 現地での交流学習

ブラッセル日本人学校は交流学習を活発に行っている。児童・生徒たちは現地の学校と交流学習(下写真・左側)を行ったり、現地の行事に参加することによってお互いの文化や習慣などを伝えあい、生徒たちは有意義な時を過ごしている。また、地元のサッカーベルギー1部リーグ「STVV (シント=トロイデンW)」やサッカー日本代表との交流(下写真・右側)が行われた。



4 成果

ベルギーにおいて、2019年から外国人労働者受け入れの仕組みが変わり、ベルギーに入国するためには統一許可証シングルパーミットの取得が必要となった。そのシングルパーミットを取得するため2ヶ月の時間かかり、全日制では校長はじめ6名の文科派遣教員が4月と5月の約2ヶ月入国が出来なかった。6名の先生がいない状況は本校文科派遣の教職員の約1/3強にあたる。学校の対応として欠けた担任については担任予定でない教務主任や中学部主任が一時的な担任代行を行った。抜けた授業については時間割を調整し授業に空きが生じないよう時間割を組み直した。これにより、職員室には授業時ほとんど誰もいない状況が生まれたのではあるが、学校は始業式・着任式・入学式と大きな行事から予定通り実施した。これができたのも全職員が問題意識を持ち一丸となって児童生徒のため取り組むことが出来たからである。今年度以降の新派遣者の入国については、在ベルギー日本国大使館のベルギー当局への対応によりこの様にならないことをお聞きしている。

このような学校での大きな課題を克服するには、教職員の意識を高め、今いる先生方の力を結集し教育の質を落とすことなく保護者に信頼される学校運営を進めていくことが必要だと考える。このようなピンチを共に乗り越えてくれた先生方と職員全員に感謝する。

しかし、現在、世界中でコロナウイルス感染症が猛威を振るっており、昨年以上に新派遣の先生方が世界的に入国できないでいる状況であり、今後の見通しが立たないことが心配である。

最後にベルギーでの3年間は本当に多くの人との出会いがあり、なかでも、世界各地や日本各地から来た生徒・児童たちとの出会いは素晴らしいものであった。同時にブラッセル日本人学校に集まった教師をはじめ職員との繋がりはかけがえないものとなった。

1. 赴任地（フィリピン・マニラ）の概観

ルソン島やミンダナオ島を中心に、7,109の島々から構成された諸島国家で、マレー系の民族が多く住む。過去の歴史もあり、日本や中国、アメリカ、スペインとの混血の人々も少なくない。そのため、国民性としては、ラテン系の気質が色濃く残り、明るく前向きで、ホスピタリティに溢れる人が多く、家族や子供を非常に大切に作る風習がある。宗教は、ローマ・カトリック教徒が83パーセント、その他のキリスト教徒が10パーセントと、ASEAN唯一のキリスト教国である。そのため、どこの町にもキリスト教の教会があり、週末のミサが行われる時間帯には、教会に数多くの人が押し寄せる。公用語は、フィリピン（タガログ）語と英語である。国内のほぼ全域で英語が通用するため、我々外国人が暮らすには、言葉のストレスはほとんど存在しない。そのため、英語圏を中心に、フィリピン人出稼ぎ労働者（OFW）が重宝され、毎年100万人以上が出入国するため、年末年始の空港は非常に混雑する。土着語は80前後あり、厳密には統一されていないのが現状である。また、どの地域でも、国語としてタガログ語が教えられるが、難解であることから、完全に習得することは困難であるらしく、異なった地域の人同士が話す際は、タガログ語に英語が混じった「タグリッシュ」で話されることも多い。気候は熱帯で、四季はなく、乾季（11～5月）と雨季（6～10月）の二季に分かれている。首都圏では、年間の最低気温でも20℃前後と高温であるため、年中のほとんどを半袖、半ズボンで過ごすことができる。治安は、外務省の危険レベル1から3までと様々で、首都圏でも、空港やショッピングセンター、ホテルに出入りする際は、保安検査のため、ボディチェックと所持品のチェックが必ず行われる。ミンダナオ島西部で、断続的にイスラム過激派組織、共産主義反政府組織などによる無差別テロ、身代金目的の誘拐事件等が発生していることが、国民の危機意識に色濃く影響している。



2. 赴任校（在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校）の概観

本校が設置されている地域は、マニラ首都圏・タギッグ市内のボニファシオ・グローバル・シティ内である。周辺は、通称ユニバーシティ・パークと呼ばれ、本校、英国系のブリティッシュ・スクール、2校のインターナショナル校、大学が数校設置されている文教地区である。また、一般庶民の主な交通手段であるジブニー（乗合バス）の乗り入れが制限され、フィリピンの富裕層や、外国企業の駐在員が居住者の多数を占めているため、マニラ首都圏の中でも比較的 안전한エリアである。本校の歴史は、昭和43年に開校され、令和2年度で創立52年を迎えた。設立当初の在籍数は、小学部と中学部合わせて72名であったが、年々増加する日系企業の駐在員数とともに、右肩上がりに児童生徒数も増加し、現在では約450名が在籍している。在籍児童・生徒の比率は、小学部が8割、中学部が2割。学級数の平均は、小学部が2.8クラス、中学部が1.3クラスと、学齢が上がるにつれ、在籍数と学級数が少なくなっていく。小学部を卒業するのを機に日本へ帰国する児童が多い。また、各学級に1～2割程度、国際結婚家庭の児童・生徒が在籍しているのが特徴である。敷地面積は、4ヘクタールと広々としており、小中学部合同で運動会が行える規模の芝生のグラウンド、3つの教室棟、2つの体育館、管理棟と水泳プールが1つずつ設置されている。各教室には、無線LANと60型の電子黒板、エアコンが完備され、ストレスなく授業を行うことができる。大きな学校行事は、10月に行われる「MJS フェスティバル（文化祭）」と、1月に行われる「MJS 大運動会」の2つがある。開催される時期は、乾季と雨季があるフィリピンの特徴的な気候を鑑み、決定されている。どちらも小中学部合同で行われ、小学部の6年生と中学部の生徒たちが協力し、学校全体のリーダーとして、小学生をまとめ、行事を運営する文化が根付いている。

MJS 大運動会の様子



3. 特色ある教育実践

特色ある教育実践として、週1～2回行われる「英会話授業」、1年を通して行われる「水泳授業」、「現地校との交流」の3つが挙げられる。

まず、英会話授業は、小学校1～4年生が週に2時間、小学校5年生以上が週に1時間の授業を受講しており、他教科と同様、通知票にも評価を記載している。各学年の児童・生徒を6段階の習熟度別のクラスに分け、概ね10人前後の少人数制で授業を行っている。児童・生徒の習熟度は、初めて英語に触れるレベルから、ネイティブレベルまでと様々で、少人数制で授業を行うことにより、きめ細やかな指導ができて

いるといえる。指導は、20年以上本校で勤務している講師、将来はJETプログラムを利用し、日本でALTとして勤務することを希望している講師、前職は看護師、という多才なフィリピン人の講師6人が、月1回行われる日本人教員とのミーティングを行い、授業内容を検討の上、実施している。使用しているテキストは、小中学部それぞれ本校独自のものを使用しており、5年ごとに内容の見直し、改訂を行っている、ケース別の日常会話が主な内容のものである。

英会話授業と同様、水泳の授業も習熟度別の少人数制で授業を行っている。各学級を3つに分け、2人のフィリピン人講師と、学級担任を主とする日本人教員1名の3名で指導に当たっている。また、年間を通して20℃以上の熱帯気候を生かし、1年を通して授業が行われる。その成果を発揮するための水泳記録会が小学部低・中・高、中学部の4ブロックに分かれて行われ、多くの保護者が来校される。転入直後は水に顔をつけることすらままならなかった小学生が、1年後には25メートル、50メートルを平気で泳ぎ切っている場面も多く見られ、子どもたちの成長の速さに驚かされる。

現地校との交流は、小学部3年生以上から行っている。小学部中・高学年・中学部の3つのブロックに分かれ、それぞれ現地校への訪問と、受け入れの2回を毎年行っている。現地校への訪問では、フィリピンの伝統文化を体験させてもらい、受け入れでは、現地校の児童・生徒たちに日本の伝統文化を紹介し、体験してもらっている。私が2年間所属していた中学部では、本校の生徒に学年ごとに3つのテーマを与え、総合的な学習の時間を使って、日本の伝統文化を英語で伝えるための指導を行った。それぞれ1年生は、調理実習を行い、日本の食文化を伝え、2年生は、習字、消しゴムを使ったハンコ作り、二人羽織などの伝統文化を伝え、3年生は8から10グループに分かれた現地校の生徒の引率を行うファシリテーターの役割を担った。

4. 成果（派遣教員として得たもの）

3年間の派遣の成果として、能動的・主体的に学校を運営することのやりがいを実感しながら、当地でしか学べない学び、当地でしか出会えない方々との出会いを創出できた。

当地に派遣されるまでは、管理職や教育委員会の通達に沿って、どちらかというと受動的に、その職責をこなしてきた。当地では、日本からの情報や教材、学用品が限られ、日本では想像し得ない事態が突発的に起こる労働・生活環境下であった。その中で、児童・生徒たちに日本と同等もしくは、それ以上の学習環境を整えるため、全国各地から派遣された同僚たちと主体的に知恵を出し合い、切磋琢磨し、駐在員を中心に組織されている運営理事会の方々のご協力を頂きながら、臨機応変に学校を運営することが求められた。そのためにも、異なった環境や文化の中、日本の教科書の内容をどのように教え、児童・生徒たちの実生活にあるものをどのように学びに繋げていくか、という工夫が求められた。その結果、当地でしか学べない学び、当地でしか出会えない方々との出会いを創出することができた。

児童・生徒の成長のためと思い、広げてきた全ての方々との人脈が、結果的に自らの成長にも繋がった。この出会いをさらに広げ、世界に羽ばたきたいという生徒や後進の育成に全力を注ぎたい。

水泳記録会の様子



香川真司選手との対談



ミラノ日本人学校に赴任して

ミラノ日本人学校（尼崎市立中央中学校）北野 貴誠

1. 赴任地の概観

(1) イタリアについて

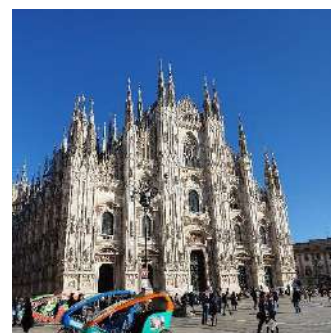
イタリアは、欧州連合（EU）、G7、G20の加盟国で、国内総生産（GDP）は世界第8位の国です。ヨーロッパではドイツ、イギリス、フランスに次ぎ4番目という経済国になったが、近年はEU全体の経済危機でイタリアも苦しい状態が続いている。

面積は日本の約80%、人口は約6,000万人で日本の約半分。さまざまに異なる歴史、文化に育まれ個性あふれるイタリアの町々。バロックの町首都ローマ、ルネッサンス都市フィレンツェ、芸術とファッションの都ミラノ、水の都ヴェネツィア、永遠の劇場ナポリ。それぞれの地域に特色がある。また、ユネスコ世界遺産が55ヶ所と、中国と並んで世界で1番多く、世界中から人々が訪れる観光大国である。2016年は日本イタリア国交150周年、2017年は日本バチカン市国国交75周年にあたる記念の年であった。

(2) ミラノについて

ミラノ市は人口約130万人で、ローマに次ぐイタリア第二の都市である。イタリアの北部、ロンバルディア州の州都であり、ミラノ県の県都でもある。市の中心に林立するオフィスとは対照的に、いったん古い町中に足を踏み入ると、中世のおもかげも残っている。ミラノ市は、ドゥオーモを中心として、道路も町並みもほぼ放射線状に展開し、よく発達している。また、ローマやジェノバ、ヴェネツィアなどの主要都市や隣接する他国の都市と高速道路や鉄道網で結ばれている。2026年の冬季オリンピックの開催地に決定している。ミラノの気候は、日本の気候ととても似ており、日本のように四季がある。しかし、夏は乾燥して暑く、秋は短く、冬は湿度が高く霧がかかり寒いのが特徴である。ミラノは北海道の稚内市とほぼ同緯度（北緯45度）に位置しているが、雪はさほど降らない。

ミラノ県には、2016年の統計で日本の進出企業約211社（外務省 海外在留邦人数調査統計）、在留邦人約3,500人が居住している。このほか、トリノ、ジェノバ、ヴェネツィア等の北イタリアの諸都市にもそれぞれ数十人～数百人が住んでいる。北イタリアの在留邦人がミラノに集中しているのは、ミラノが商工業の中心地であるばかりでなく、音楽、美術、建築などの分野でも重要な地位を占めているからである。そのため、留学生は音楽部門の人をはじめ、彫刻、絵画、建築、デザインなど多岐の分野に及んでいる。



2. 赴任校の概要

ミラノ日本人学校は1973年に日本語補習学校として発足し、1976年に日本政府が認める在外教育施設として、また、イタリア政府公認の私立学校として開校した。今年で開校44年目を迎え、「明るく（知恵）優しく（心）たくましく（体）」を校訓に、人に優しさ、自分に強さを身につけ、自ら学び、考え、世界につながろうとする子どもの育成を目標としている。児童生徒数はここ数年、80人前後で推移しているが、今年は「Dream & Challenge」をキャッチフレーズに、たしかな学力の向上と豊かな人間性の醸成に向けてきめ細やかな教育実践に力を入れている。

令和元年度の派遣教員は11名、現地採用教員は4名、事務職員2名で学校を運営している。小学部から中学部まで各学年1クラスで授業が行われている。

比較的安全な地域に学校が設置されているので、児童生徒は徒歩で登下校ができる。ただし、住宅街にあるため屋外施設に運動場はなく、中庭と遊具のある緑地のみであった。水泳指導はミラノ市のプールまで徒歩で移動して実施した。



3. 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育

小学生は、農業体験やワイン・パスタ工場見学、レオナルド・ダ・ヴィンチ博物館見学やクレモナのバイオリン工房見学などイタリアの風土や歴史・文化をじっくり体験する現地理解教育を学年ごとで行っている。

全学年で、現地校との交歓会を年2回実施している。小学生はイタリアの現地校に訪問してイタリア文化や学校の教育事情などを学んでいる。また、日本人学校に現地校の児童を招待するときには、日本文化や学校生活をイタリア語で、プレゼンを行い日本について情報を発信している。中学生の交歓会は、フランス人学校と交流を行っている。お互いに普段はそれぞれの母国語で学習しているが、交歓会のときは第2言語として学習している英語を使って交流を行っている。特に4人から5人の小グループでグループ活動を取り入れ、課題解決のために、英語での会話が必要とされる活動を行っている。準備したセリフではなく、生の英会話をを行う機会をつくっている。



さらに、小学部高学年から中学部を対象に、年間2回の宿泊体験学習を行っている。北イタリア・アルプス山麓の大自然に行き、トレッキングを中心としたスポーツ体験や、アルプス地方の文化や歴史を、食べ物、古城や遺跡の見学を通して学習している。冬はアルプス地域において、スキー体験学習を行っている。アルプスの雄大な自然を感じることができる行事である。

(2) 英語、イタリア語の言語教育

ミラノ日本人学校では英語の授業とは別に、放課後に英語講座を実施している。講師は英会話スクールの外国人スタッフに委託して、児童生徒の習熟度別に英語学習に取り組んでいる。また、年間3回の英語検定を準会場として行っており、英語検定取得を推奨している。中学生では英語検定準2級から準1級レベルを取得している生徒が多い。小学生でも高学年であれば、3級から準2級を取得している生徒もいる。

イタリア文化の学習において、イタリア語の授業も行っている。小学生は週2回、中学生は週1回のイタリア語を学んでいる。イタリア語を使って、学校近くのパル、スーパー、ジェラート屋、衣料品店などに行き、イタリア語を使う活動を行っている。



(3) 異学年交流、小中連携

中学部の生徒が20名程度なので、実技教科や総合的な学習の時間は中学部3学年で授業を行うことがある。キャリア教育の中で、学習したことをまとめて発表する時に、上級生が下級生に発表のスキルを伝えたり、リーダーとしてまとめたりすることで、学年を越えて学び合うことができた。また、小学生とも交流することがあり、日常的に小中連携の活動が行われている。児童生徒にミラノ日本人学校の良さを尋ねると、「学年を越えて仲が良い」と答えることが多い。児童生徒も異学年交流の良さを実感している。

4. 成果（教員として得た物）

協調性、協働することが大切であると改めて実感した。日本人学校は全国各地から、異なる校種の教員が派遣されている。日本の地域では当たり前と考えていたことも、取り組み方や指導の方法が異なる。しかし、行事や授業において、目指しているのは「子どもの成長」であるから、教員同士でよく相談して協働していかなければならないことを改めて実感した。

小学生、中学生と関わることで、発達段階に応じた学習方法や形態、学習支援の方法を学ぶことができた。特に理科においては、小学校の理科の学習内容が、中学校にどのように結びついているかを実感することができた。中学校での躓きが、小学校のどの段階で起こっているものかを知ることができた。

海外で生活することで、日本文化を改めて考えとともに、海外の文化の善い点も感じることもできた。例えば、公共交通機関に乗っていると、子どもに対してとても親切に対応してくれる。挨拶では、目を合わせ、笑顔で接することが礼儀であった。店に入るときも、客が挨拶をして入店する。挨拶から人との関係ができることが大切であると改めて感じた。

帰国後、日本での生活を送っているが、物事の捉え方が派遣前とは異なる多角的な考えができるようになったと感じている。今後の教員生活に活かしていきたい。

1 赴任地の概要

大連市は中国東北地域、遼東半島の南端、北緯 38 度・東経 121 度に位置する。日本の仙台市とほぼ同じ緯度で、日本との時差は-1 時間である。気候はモンスーン型温帯気候に属する。しかし、雨が少なく乾燥



遼寧省大連市
(国家計画単列都市、副省級市)



している。漢民族が全体の 94%以上を占めており、その他には朝鮮族、満州族、回族、シボ族、モンゴル族など、55 の少数民族が住んでいる。

清の時代まで村であった大連だが、1898 年にロシアの租借地となり、近代都市としての建設が始まった。日露戦争以降はロシアに代わって、日本が約 40 年間、大連を統治した。1945 年には大連市政府が成立。改革開放後、1984 年には中国でいち早く沿海開放都市に指定され、日系をはじめとする外資系企業が進出した。東北地域最大の良港を持つ大連は、日系を中心とする外資系企業の加工貿易拠点が集積しており、海外から多くの投資があり、中国東北部の工業、商業、貿易等の中心となっている。大連の主幹産業には、石油化学、設備製造、IT・ソフトウェア機械等がある。このうち機械は、造船や一般機械、発電機、工作機械、計測器、農業機械等となっている。大連市西南部にはソフトウェア産業を集中して発展させるために、市政府によって設立されたソフトウェアパークや高ハイテクパークがある。

現在の大連は、旧ロシア人街や旧日本人街など歴史を感じさせる建物と、アジア最大の広さの星海公園など近代的な建造物が立ち並ぶ近代都市となっている。

2 赴任校の概要

大連日本人学校は、平成 2 年に補習授業校としてスタートし、平成 6 年 4 月に日本人学校として開校した。その後平成 27 年より大連市経済技術開発区湾里南に、令和 2 年より大連市開発区遼河西路に所在地を移した。

小中一貫校であり、小学部 1 年から中学部 3 年まで各学年 1 クラス、9 クラス編成となっている。児童生徒数は平成 27 年の学校移転に伴い減少したものの、近年は小中学部合わせて約 140 名程度が在籍する。教員は管理職を含め 18 名が在籍し、理科や図工、英語や中国語などは教員の専門性を活かして学習指導にあたっている。



↑ 新校舎 講堂

学校の施設・設備は教室備品等も含め、日本と同等の教育が行える環境が整っている。また教材は日本の業者に発注し、足りないものに関しては現地で調達している。ただ大気汚染の数値が高い日には屋外活動を制限したり、インターネットの制限によって情報が手に入りにくかったりするため、学習面・生活面で指導の工夫が必要である。

小規模ではあるが小中一貫校の特色を活かし、異学年の交流や縦割り班活動を通し、協力やコミュニケーション能力の育成を図っている。また中国語・英語学習や国際理解教育、現地校交流や校外学習などを充実させ、国際的な感覚を養わせている。

在外教育施設の特性上「子どもたちの安全の確保」を最優先事項とし、下校や集会をはじめ日々の学校生活での積み重ねが、緊急時の訓練になることを意識して学校生活を送っている。

3 特色ある教育実践

(1) 「中国語と中国文化」の授業

小学部では、歌・ゲーム・クイズ・遊びなどの体験的な活動を通して、中国語の基礎や日常会話、コミュニケーション能力の素地を養うことをねらいとしている。中学部では、習熟度別に授業を行い、中国語の文字を正しく認識し、単語の意味と簡単な文法を理解しながら文章を書いたり、読んだりすることをねらいとしている。また小中学部ともに、中国や外国の文化について理解を深め、さらに日本語や日本の文化についても理解を深めることをねらいとしている。



↑ 中国語の授業

(2) 現地校との交流

全学年が、年に1～2回程度、現地校との交流を行っている。毎年継続的に交流している学校もあれば、本年度から交流を始めた学校もある。主な交流内容は、日中の文化や学校生活を紹介し合ったり、授業や部活動を体験したりすることである。また現地大学との交流も行っている。令和元年度は、小学部3年生が日本語専攻の学生から中国の伝統的な遊びを教わった。



↑ 現地校との交流

4 成果

私が派遣教員として得たことは、異国の文化を理解する心構えである。

私は大連日本人学校に赴任した年に5年生を担当し、総合的な学習の時間で「大連の中の日本」をテーマに学習を進めた。そこで子どもたちに日本と大連のつながりを考えさせるために、「昔の町の様子」を調べる学習計画を立てた。日本と大連の歴史と聞くと、多くの人が日露戦争、遼東半島、三国干渉、南満州鉄道といった言葉を思い浮かべるのではないだろうか。

・・・大連は三国干渉の後、ロシアの租借地となり、日露戦争後、日本が統治しました。その後、日本政府は満州に勢力を拡大するため南満州鉄道株式会社をつくり、鉄道の守備兵として関東軍をおきました。1931年に関東軍は満州事変で満州全土を占領し、1932年に満州国をつくりました。・・・これが日本の教科書で習う歴史の内容である。

「中国に満州や満州国は存在しない。」ある中国の方に取材させていただいた時の言葉である。大連市内は、南満州鉄道株式会社によって交通網が整備され、様々な建物が建てられた。満鉄陳列館（満鉄の博物館）の資料や今も残る当時の建物から、南満州鉄道株式会社は大連市内の発展に貢献したことが伺える。しかし中国の方々からすれば、これは日本によって支配された歴史なのである。

また大連から400kmほど北に瀋陽（昔の奉天）という都市があり、この近郊の柳条湖付近で1931年9月18日柳条湖事件が起きた。瀋陽には九・一八歴史博物館があり、事件の歴史を後世に語り継いでいる。ここでの式典で、最近では2014年に反日デモが起きたようである。

自分が戦時中の日本と大連の歴史に直接関わったわけではないが、日本人としてこの地で起きたことをしっかりと理解し生活しなければならないことを痛感した。大連市は、中国の中でも親日家が多いと言われている。日本のアニメやゲームは大連でも大変人気で、日本の企業もたくさん進出している。しかし、時が流れ時代が変わったとしても、過去の歴史が変わるわけではない。

上記の出来事以前の私は、異国の文化に触れた時、自国の文化を基準に異国の文化を感じ、その違いを否定的に捉えることが多かったような気がする。しかし、「大連の中の日本」の学習指導以降、私は中国独自の文化や価値観に出会う度、その歴史的背景や理由を考えるようになった。これこそが異国の文化や価値観を尊重する心構えだと、私は考える。私は大連での学びを、子どもたちや先生方にも伝えていきたいと思う。



1 赴任地（国）の概観

日本との時差は1時間。広州（Guangzhou）は中華人民共和国の南部広東省にある。熊本県ぐらいの広さ（7,434km²）で人口は約1,823万人。日本からの直行便も多く、東南アジアへのアクセスも良い。毎年4月と10月に交易会が開かれ、期間中には数万人のバイヤーが世界各国から広州を訪れるなど、鉄道・高速道路・航空・海上輸送も含めた流通の一大拠点となっている。高層ビルの建設やインフラ整備、都市開発が今も急ピッチで進められ、経済特区である深圳と一国二制度の香港・マカオを含めた広東エリアは、中国経済を支えるだけでなく、中国が目指す「一帯一路」戦略においても非常に重要な場所に位置づけられている。日系企業はトヨタ・ホンダ・日産が自動車製造ラインを整え、関連する銀行や商社・物流・製造など多くの企業が進出し、約8,000人の邦人が暮らしている。



2018年、中華人民共和国と日本国は「日中(中日)平和友好条約締結40周年」を迎えた。昨今の日中両政府の友好姿勢により、在広州日本総領事館主催のパーティーや講演会、両国の子どもたちによるタイムカプセルの埋蔵、広州日本商工会による商業イベントや駅伝大会など、多くの催しが開かれた。私自身も家族で駅伝大会に参加させていただくなど日中友好の発展に寄与することができた。中国でも日本のアニメや漫画、浴衣など日本文化への関心も高く、日系企業への就職を目指して日本語を勉強する学生も多い。

2019年は中華人民共和国にとって「建国70周年」となる節目の年であった。中国共産党の思想と経済発展の成果が、国内だけでなく全世界に大々的に喧伝される一方、天安門事件から30年、香港デモや台湾総統選挙、米中貿易摩擦の影響もあり、緊張感のある1年となった。中学部2年生の担任として北京修学旅行を引率し、建国記念日（10月1日）直前の北京をつぶさに見ることができたのは貴重な体験となった。

2020年2月以降、湖北省武漢を発生源とする新型コロナウイルスの感染拡大により、広州市も監視体制が強化され移動も制限された。ロックダウン（都市封鎖）によりゴーストタウンとなった街の状態や、社会主義体制下での規制強化の迅速な動き、感染拡大防止と消毒徹底の様子を直接肌で感じることができた。

2 赴任校の概要

1982年3名の補習校として開校。1995年4月、広州日本商工会の寄付金と在広州日本総領事館の支援を受け、私立学校として設立された。文部科学大臣より在外教育施設としての認定を得ているほか、中国の国家教育委員会及び広東省教育庁の承認も得ている。2019年には創立25周年、児童生徒450名を誇る学校となった。体育館、屋内プール、人工芝のグラウンド、全教室の空調完備、中庭にバナナの木があるなど、教育環境としての設備は十分に整っている。



中国語教育・英語教育を小学校低学年から取り入れ、世界で活躍するグローバルな人材を育成すべく、日本と同等かそれ以上の教育を提供している。しかし、新型コロナウイルスの影響で邦人の行き来や家族帯同の赴任が制限され、今年度(2020年度)は在籍約260名中登校再開が50名ほどでのスタートを余儀なくされている。教育目標「自ら学び、個性豊かに国際社会を生きる児童生徒の育成」 学校HP <http://jsgcn.com/>

3 特色ある教育実践

(1) 商工会との連携による教育活動の展開

本校は、領事館や商工会との連携が密であり学校行事の多くに協力・支援をいただいている。具体的には、小学部では、社会科で使用する副教材の製作協力、クロネコヤマトの交通安全教室、イオンスーパー

の見学、トヨタ自動車工場の見学、明治アイス工場の見学、キリンビール工場の見学、JALの環境・航空教室など。中学部では、日本電気硝子のディスプレイ工場見学、オイスカ幼稚園の保育実習、2日間の職場体験（JAL・ANA・すき屋・日航ホテル・ヤクルト・明治アイス）。全体としては、夏祭りの開催や施設の充実、JTBやHISによる修学旅行や宿泊研修のサポートなどである。

(2) ロイロノートスクールの活用による教育活動の展開

2019年12月のiPad導入に伴い、授業での調べ学習や意見の集約、シンキングツールの活用など、数名の先生で積極的にロイロノートスクールの活用を始めた。2020年2月以降、休校措置のため一時帰国する児童生徒が9割を超えた状況となり、全校生を対象にした授業や課題の提供、学習指導をロイロノートスクールで行うことになった。同じく兵庫県派遣のE先生と大分県派遣のY先生と協力し、保護者向けの文書作成、アプリのダウンロードやログイン方法の呈示、全職員への研修など、全校での展開と運営の土台作りを行った。帰国した現在の勤務校でも、非常事態宣言の中での課題提供や未来の学習指導の在り方について、情報提供や可能性を成果として示すことができている。

ロイロノートスクールHP <https://scrapbox.io/loilo-teacher-support/休校対策まとめ>

(3) 現地校との交流

毎年、小学部は東風東路小学と台湾人学校、中学部は私立華聯大学の日本語学科・英文学科の学生と、相互訪問をする形で年2回の交流会を行っている。自己紹介や互いの文化をブースごとに紹介するなど、他国の文化を学び、国際理解を深める取り組みとなっている。今後も日中友好の発展を期待している。

(4) 縦割り活動と学校行事

運動会だけでなく、毎週のキッズタイムや年5回の音楽集会を小中合同や、縦割り活動で行っている。小中一貫校ならではの素晴らしい取り組みであり、異学年への理解や責任感の向上など心の成長が見られる。日本でも小中連携の取り組みが進められており、この経験を地域の教育に生かしていきたい。

(5) 深圳日本人学校とのプレゼンピック交流会

深圳日本人学校とは車で約2時間の距離で、毎年バスケットボール部の交流試合や職員合同研修を行っている。2019年、深圳より提案をいただき本校も快諾。中学部主任の私が担当者となり調整を重ねた。「現地理解を深める」「プレゼンテーション能力を向上させる」「視野を広げ共に生きていこうとする心情を養う」ことをねらいとし、インターネットやテレビ会議システムを使った交流もよりも毎年互いに訪問し合う形を重視し、「第1回広州・深圳プレゼンピック交流会」を本校で開催することができた。

2020年1月9日、開会行事と代表生徒による学校紹介の後、全生徒が各テーマ（歴史・街並み・観光スポット・経済・日本人学校）に沿って、紙媒体の他iPadやタブレットで動画や写真を見せながらプレゼンを行った。深圳の生徒は縦割りのグループで議論をしながらテーマを深め、分析し、自分の考えを発表するところまで準備ができており、大変勉強になった。合唱披露、一緒に昼食を食べた後学校案内を行うなど積極的に親交を深め、生徒も多くの刺激を得ることができたようである。今後も継続して続けられる教育実践に繋げることができた。



(6) 初任期教員研修と研Q通信の発行

学校全体の職員研修（道徳や評価）だけでなく、文部科学省派遣教員が各専門分野（教科・保護者対応・特別支援・情報機器・安全指導など）で、海外子女教育振興財団採用の教員に向けた初任期教員研修を行っている。また、全教員が自らの取り組みを年2回の研Q通信で発表し、情報の共有を行っている。

4 成果（派遣教員として得たもの）

この度、多くの方々のご理解で貴重な研修の機会をいただいた。得たものは数多くあり、本当にかげがえのない三年間を送ることができた。他府県の先生方との交流や情報交換はもちろん、様々な主任を任せいただき「学校を動かす」立場も経験できた。帰任した淡路島の広田中学校は小学校と隣同士で運動場も共有。広州日本人学校で経験した小中一貫校の発展した形を少しでも提供し、地域に貢献していきたい。

逆に、震災・学校支援チーム（EARTH）で活動させていただいたノウハウを、学校安全マニュアルの見直しや防災教育、通学バスの取り組みや非常事態下での学力支援といった場面で生かすことができ、兵庫県が取り組んできた教育について、より魅力を感じることもできた。

海外で働く多くの日本人の気概にふれながら充実した生活を送り、中国から見えた政治制度の違いや国際関係、世界経済の動きは非常に面白く、今後の社会科授業においても存分に生かすことができる。この度の広州での長期研修で得た経験やネットワーク、日中友好の精神をこれからの教育活動に役立てていきたい。

上海日本人学校虹橋校に赴任して～グローバル人材の育成を目指して～

宝塚市立丸橋小学校 山本 佳奈

1. 赴任地（中国及び上海）の概観

中華人民共和国は、アジア大陸の東部、太平洋の西海岸に位置し、22省、5自治区、4直轄市（北京・天津・上海・重慶）、2特別行政区（香港・マカオ）から構成された国である。様々な歴史を経て1949年に中国共産党が建国した社会主義の大国で、めざましい経済発展とグローバル化を遂げてきた。

国土面積は960万km²にもおよび、世界第3位の広大な国である。また、総人口は13億8200万人あまりと世界第1位で、日本の約10倍もの人々が生活している。全人口の約92%は漢族であり、残りの約8%を独自の文化と言語を有する、55もの少数民族が占めている多民族国家である。



上海市は4直轄市の1つで、長江デルタの東南部に位置し、中国最大の都市である。商業・金融・工業・交通などの中心地として急速に整備され、近代的な都市として世界的に注目されている。東京からは2.5時間、福岡からは1.5時間の場所に位置し、日本にとっては地理的にも近く、身近な都市と言えるだろう。日本人居住者は2000年以降の中国の急速な工業化により、日本企業の進出が相次ぐのにもなって増加し、現在は長期短期含め約4万3000人となっている。この数は、ロサンゼルス・バンコク・ニューヨークに次いで第4位となっており、日本と繋がり深い都市である。

2. 赴任校（上海日本人学校虹橋校）の概要



上海日本人学校虹橋校

上海市には日本人学校が2校設置させている。黄浦江を挟んで東側の地域に浦東校、西側の地域に虹橋校がある。日中交流の進展と中国経済の著しい発展により、上海への日系企業進出が進んだことで児童生徒数が急激に増加。1996年には虹橋校を開校し、2006年には、急増する生徒を受け入れるために、浦東校を設立した。2011年には世界中にある日本人学校で初の高等部を浦東校に設置、2018年には両校に特別支援学級を設置した。

私が赴任した虹橋校は、上海市の中心部（市役所）より西の方角に約8kmの住宅地にある。約2万m²の敷地を有し、冷暖房完備の南棟（2階）、北棟（3階）、東棟（5階）、二つの体育館、通年で使用できる温水プール、200mトラックと天然芝の広い運動場など、恵まれた教育施設が整備されている。児童数は1100名を超え、学級数も40を超えている。児童の多くは校車バスで通学している。教員は、外部講師を含めて80名を超え、中国人スタッフや事務職員も含めると総計100名を超える大規模校である。

3. 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育の充実



①現地校交流：中国や日本の文化について学びを深めたり、現地校の児童と交流し親善を深めたりすることを目的に実施している。現地校交流は、児童が実際に中国の児童と交流することができる貴重な機会となっている。例えば、現地校を訪問した際には、端午節（中国の祝日）について教えてもらい、一緒に香り袋を作った。また、日本人学校に招待する際には、ひな祭りについて説明し、折り紙で簡単な雛飾りを作るなどの活動を行った。その他、中国や日本の伝統的な遊びやゲームを

したり、一緒に歌を歌ったりなど、学年に応じて様々な活動を計画している。言語の違いによって伝わりにくい場面もあるが、中国語が堪能な児童が通訳をして会話をリードしたり、中国語の授業で習った簡単な会話やジェスチャーを駆使したりして、多くの児童が積極的に交流している。

また、教員間の交流機会も別に設定されており、上海市の学校現場の実態や、教育事情について学ぶことができた。特に外国語活動（英語）の授業実践や、ICT 機器の活用などは大変参考になった。



②**チャレンジタイム**：各学年の PTA 役員及び日中コミュニケーション委員が中心となり、中国文化に親しむ機会を設けている。チャレンジタイムは現地校交流と同様に児童が毎年楽しみにしている行事で、プロの方の実演を見たり、実際に体験してみても指導してもらったりしている。中国雑技・花文字・カンフー・変面ショーなど、学年ごとに工夫を凝らした活動が行われており、児童の興味関心を高めるものとなっている。

(2) 外国語教育の充実

虹橋校では、全学年で英語の授業と中国語の授業を週 1 時間ずつ取り入れている。英語の授業は毎回 ALT と教員が協力して行う。ALT はオールイングリッシュで授業に参加するので、児童はネイティブの発音を毎週たっぷり聞くことができる。また、イングリッシュタイム（朝の 15 分程度でのモジュール的活動）でも英語の歌を歌ったり、単語や会話の反復練習をしたりして、英語の学習を充実させている。中国語の授業は、中国人講師が会話レベルによってクラス分けをし、一人ひとりが自分のレベルにあった学習を進めている。また、中国の文化を紹介して体験したりする活動を取り入れたり、現地校の児童と交流するための簡単な会話を練習したりするなどして、実用的かつ児童の興味関心を高める授業が展開されている。

(3) 特別活動の充実

虹橋校は毎年、特別活動に関する「テーマ」を決め、そのテーマに沿って全校児童が主体的に活動している。児童数が 1000 人を超える大規模校である為、充実した特別活動を行うためには、綿密な計画が必要であるが、児童と教員が協力し、意欲的に活動している。特に高学年の児童は、縦割り班活動や委員会活動、様々な行事を通してリーダーシップを発揮し、積極的に活動している。委員会活動では、各委員会が様々なイベントを企画して実施したり、クラブ活動では、中国の文化に触れあうことができるクラブを開設したりしている。また、運動会や学習発表会などにも力を入れて取り組み、児童のリーダー性や自主性を高めている。

4. 成果（派遣教員として得たもの）

私が今回の在外教育施設への派遣で得たものはたくさんあるが、大きく 3 つにまとめることができる。1 つ目は、様々な地域や国から集まった教員の授業実践を見たり、一緒に協議したりする中で、自分の実践を振り返るとともに、新たな方法を試行錯誤しながら、教育技術を磨くことができたことである。また、上海で生き生きと学ぶ子ども達の姿からも多くの刺激をもらった。こうした様々な経験や実践を積んできた人々との出会いは、私の視野や見識を大いに広げてくれた。2 つ目は、日本と関わりの深い国である中国のよさや、日本のよさを再確認することができたことである。実際に生活し、現地の人々と関わったからこそ感じられるよさがあり、離れてみて初めて気付くよさもあった。3 つ目は、これからの教育実践の課題や目指す子ども像がより具体的になったことである。

最後に、今回の赴任にあたって、本当にたくさんの方々にお世話になり、大いに支えていただいた。今回の学びや成果を広め、今後の教育活動に生かしていきたい。

深セン日本人学校に赴任して

神戸市立だいいち小学校 吉田 菜由

1. 赴任地の概観

深セン市（深圳市）は、中華人民共和国広東省にある都市である。広東省は、中国南東沿岸部に位置し、世界の人口を誇る中国の中で最も人口が多く、約1億人いると言われている。広東省内には2つの日本人学校があり、深セン日本人学校の他に、首都である広州市に「広州日本人学校」がある。車で2時間ほどの距離なので、毎年研修会を行ったり、中学部で部活動交流を行ったりするなど、日本人学校同士の交流ができる。



深セン市は、南が香港と隣接している為、1980年に経済特区として指定された。たった40年で、今や、北京市、上海市、広州市と共に、中国本土の4大都市と称されるまでに急速に発展している。「ファーウェイ」、「テンセント」、ドローンの製造大手「DJI」など、著名な中国企業が本社を構えており、電子機器の製造が盛んなことから、「アジアのシリコンバレー」とも呼ばれている。経済特区に指定される前は、香港と隣接していながら（隣接しているからこそ？）小さな漁村を中心とした地方都市であった。そのため、今も漁村の面影も残しており、沿岸部にある市場には新鮮な魚介類が並んでいる。そんな下町風情のある地区のすぐ隣には、高層ビルの立ち並ぶ地区がある、というような、二面性を合わせもつ所も深センの魅力であると感じる。

香港へのアクセスも良く、イミグレーション（国境）を抜け、バスで30分ほどで市街地に着くため、以前は週末に香港に買い物に行くこともできていた。（中国・香港の情勢悪化・コロナウイルス問題で、現在は難しい。）香港だけでなく、マカオへのアクセスも良く、中心地に1時間ほどで行ける為、少し足を伸ばせば中国本土とは異なる様々な文化に触れることができるのも、深センの魅力だ。一年中温暖で、植物や鳥の声から南国の雰囲気も感じられ、大変住みやすい街であった。

2. 赴任校の概要

深セン日本人学校は、2008年に開校した小中一貫校であり、今年で開校13年目の比較的新しい学校だ。児童生徒数は279名、全14学級で、日本人学校としては中規模校である（令和元年度10月現在）。右の写真が、校舎の全貌である。経済特区となった深圳市の中でも最初に開発が始まった南山区は、外国人も多く居住しており、インターナショナルスクールや韓国人学校などもこの地区に集中している。そのため、



学校用地の確保は難しく、周囲をアパート（住居）に囲まれた商業ビルを改築して学校としている。建物は2棟あるが、主として教室に利用している棟は8階建ての1棟だけだ。はじめから学校として設計されたわけではないので、教室の大きさも不揃い。運動場（校庭）も狭く（写真下、緑の部分）、プールや体育館もない。（運動会や水泳学習等は付近の施設や公共の体育施設で実施している。室内体育は校舎内のやや広いスペースで行っている。）備品等の設備は、日本と全く同じとはいかないが、日本の教育に支障がない程度揃っていて、残りは教員の工夫で対応している。

3. 特色ある教育実践

(1) 現地校交流

毎年、小中学部共に、現地校との交流会を行っている。小学部では、互いの国の文化や遊びを紹介したり、レクリエーションを通して交流している。現地校の児童はもちろん日本語を知らない。コミュニケーションは、中国語か、英語のみ。例え言語がわからなくても、身振り手振りを交えてお互い何とか伝えようとしており、それが不思議と通じ合う。この経験が、子供たちと世界との距離を縮める、貴重な体験となっていると感じた。中学部は、現地の中学校との交流と、大学で日本語を学ぶ学生とも交流活動を行っている。



(2) 校外学習

宿泊行事としては、小5での臨海宿泊学習（1泊2日）、小6修学旅行の西安（2泊3日）、中2修学旅行の北京（3泊4日）がある。現地理解はもちろん、日本とゆかりのある地も訪問し、日中の結びつきについても学んでいる。



現地の協力を得て校外学習も実施している。小2の町探検は、学校周辺にある現地のパン屋、文房具屋、スーパーなどに出向き、中国人スタッフや保護者の協力も得て、インタビュー活動を行っている。小3では日系スーパー、小4では、現地の消防局

の見学も行っている。事前学習で質問したい内容を中国語で言えるように練習をすることが、目的意識をもって中国語を学ぶ良い機会にもなる。

また、深センに会社を持つ日本企業の協力を得て、大手電子機器メーカーの工場見学をさせてもらっている。そこで勤務しているのが本校児童の保護者の場合もあり、キャリア教育としても大変有意義なものとなっている。

中学部も、職業体験実習として、日系の幼稚園や飲食店での職業体験を行っている。

(3) 外国語学習の充実

本校では、全学年週1時間、中国語の授業を行っている。教師は現地スタッフ。レベル別に3クラスに分けている。一番上のクラスの児童の多くは国際結婚家庭の児童であり、1時間中ほぼ中国語で授業が行われている。授業では、言語だけでなく中国の文化や風習も教えている。また、音楽科と連携して中国の歌も学び、音楽朝会で全校合唱を行ったり、現地校交流などで披露したりしている。

中国語だけでなく、英語学習にも力を入れており、小学部でも全学年週2時間英語の時間を設けている。現地採用の言語教員、中学部英語科の教員による日本よりハイレベルな授業で、低学年からきれいな発音で話せるようになる子も多い。保護者の英語教育への関心も高く、英検受験者も多い。

4. 成果（派遣教員として得たもの）

3年間深セン日本人学校で過ごして、教師力以上に、人としての成長を感じる。その成長は、全国から集まった多彩で個性豊かな教員、児童、保護者、商工会等で繋がる企業の方、現地で繋がった中国人、出会った人全ての関わりによるものだ。様々な価値観や考え方に触れ、自分の考え方や、価値観、感性が磨かれた。この経験を活かし、学習だけでなく子どもの感性も磨ける、そんな教師でありたい。

インドネシア バンドン日本人学校に赴任して～合い言葉「バンドン ファミリー！」～

芦屋市立宮川小学校 田邊 晃子

1. インドネシア バンドンの概観

2018年に、日本インドネシア国交樹立60周年を迎えたインドネシア共和国(Republik Indonesia)。通称インドネシアは、東南アジア南部に位置する共和制国家で、首都はジャワ島に位置するジャカルタ首都特別州である。5,110km と東西に非常に長く面積は日本の約5倍、また世界最多の島を持つ国である。赤道にまたがる1万3,466もの大小の島により構成されている。国の公用語はインドネシア語である。人口は2億6,400万人を超える世界第4位の規模であり、また世界最大のムスリム人口を有する国家としても知られている。

宗教に関しては、信教の自由を保障している。建国5原則パンチャシラでは、唯一神への信仰を第一原則としているが、これはイスラム教を国教として保護しているという意味ではない。多民族国家であるため、言語と同様、宗教にも地理的な分布が存在する。バリ島ではヒンドゥー教が、スラウェシ島北部ではキリスト教(カトリック)が、東部諸島およびニューギニア島西部ではキリスト教(プロテスタント、その他)が優位にある。アチェ州では98%がイスラム教徒で、シャリーア(イスラム法)が法律として適用されている。2010年の政府統計によると、イスラム教が87.2%、プロテスタントが7%、カトリックが2.9%、ヒンドゥー教が1.6%、仏教が0.72%、儒教が0.05%、その他が0.5%となっている。



バンドンは、首都ジャカルタから東南に約200km離れた都市である。中心地の標高は海拔700mで、四方を2000mクラスの山々に囲まれている。雨季と乾季があり、日中の気温は30℃前後、朝晩は20℃くらいである。夏の六甲山山頂とよく似た気候で、とても過ごしやすい。1946年の対オランダ独立戦争期の撤退戦での決意を歌った「Hello Hello Bandung」という歌は、多くのインドネシア人に歌い継がれている。また、1955年に、バンドン会議(第1回アジア・アフリカ会議)が開催された。

2. 赴任校の概要

1933年(昭和8年)にバンドン日本人学校は設立された。1941年(昭和16年)には、戦争激化のため閉校した。1977年(昭和52年)に、バンドン日本語補習授業校として開校した。パジャジャラン大学講師、牧師2名、教育大学留学生の計4名の講師によって、週2日の補習授業を行った。1978年(昭和53年)に、日本政府公認の補習授業校となった。2014年(平成26年)に、開校30周年を迎えた。2019年度は、幼稚園児1名、小学部児童16名、中学部生徒7名、合計24名在籍の小規模校である。現在の校舎は、個人の住宅を借りて、修理修繕を繰り返しながら使用している。小さな学校だが、幼稚園も敷地内にあり、日本語が話せるインドネシア人の幼稚園教諭が2名いる。文科省派遣教員7名と現地採用教員1名、インドネシア人の職員(事務・用務員・運転手・警備員)8名が勤務している。



一面緑の小さな運動場があり、子どもたちはもちろん教員も、毎朝元気に5分間走を続けている。校内にはマンゴー、ドリアン、ナンカ、アボカドなどの実のなる木々が茂り、南国のフルーツを楽しむことができる。とげとげの果物『ドリアン』が実ると頭上注意である。

学校の運営母体は、バンドン・ジャパクラブ(日本人会)で、多くの方のサポートがあって運営できている。運動会やもちつき会などの行事ごとに、バンドンに住む日本人の方々と交流することができた。運営の費用は、企業からの寄付金と保護者に負担していただく学費であり、保護者の負担は高額であった。(入学金:約4万円/入学時・授業料と学校維持費:約4万円/月)

3, 特色ある教育実践

(1) 少人数での学習

どの学級の人数も少なく、児童生徒一人ひとりを細かく理解することができる。学習中も教師が児童生徒のノートを見たり、発表を聞いたりする機会を多く作ることができる。また、少人数だからこそ、児童生徒同士が、自分の考えを伝え、相手の意見を受け止める場面を多く設定することができる。

(2) 小中一貫教育・幼少連携

小規模校のため、所有している教員免許以外の教科や校種で指導する必要がある。そのため、職員室で教職員が情報交換を常に行っており、その際、児童生徒についての共通理解をはかることもできた。朝の5分間走やみんな遊びの時間に、幼稚園児から中学3年生までが、一緒に遊んでいる。学習発表会や運動会などの行事も幼小中学校の全ての子どもたちが一緒に参加するのも大きな特色である。清掃活動も、縦割りで行った。中学生をリーダーに、全校児童生徒を6つのグループに分け、上級生はリーダーとしての自覚を育てる場に、下級生は上級生を見習いながらできることを増やす場となった。小学1年生がバンドン幼稚園から入学してくる時は、幼稚園教諭としっかりと引き継ぎを行うことができる。また、就学前にも同じ校内で活動する園児の様子を見て、一緒に遊ぶことができ、園児の小学校入学はたいへんスムーズに行うことができる。



(3) 現地校交流

現地の公立学校であるスティアブディ校との交流には、長い歴史がある。毎年、会場をお互いの学校として文化交流を行っている。スティアブディ校を訪れると、インドネシアの民族の踊りや空手、歌などを鑑賞し、インドネシアの絵画などを作らせてもらった。日本人学校に来てもらった時は、お琴や茶道、福笑いや書道などを体験してもらった。児童生徒同士は、インドネシア語で会話する。交流会に向けて、インドネシア文化学習の時間や普段の生活の中で言葉を学んでいる。



4, 成果(派遣教員として得たもの)

私は、中規模校での経験しかなかったので、初めは少人数の教職員で学校を運営していく大変さを感じた。そして、日本各地から派遣されている先生方のやり方から学び、協力することの大切さを感じるようになった。お互いが培ってきたものを出し合い、その場に合ったやり方を見つけていくことに、苦労した。また、児童生徒のための教育を目指すには、出身地や国を超えた教職員の協力体制が不可欠だと痛感した。とくに、現地スタッフのサポート力は、海外で日本の教育を行う上で欠かせないものだった。インドネシア学習では、現地の事務の方や幼稚園教諭が先生として、児童生徒に文化や言葉を教えている。また、ダブルの児童生徒には、インドネシア語で関わり、児童生徒をサポートしていた。どの児童生徒についても親身に関わり、気づいたことを積極的に教員に伝え、学校全体で児童生徒理解を行うことができた。事務や幼稚園の先生方が日本語を話せるので、大変ありがたかった。しかし、細かい打ち合せでは、「言葉の壁」があった。その壁にぶつかった時こそ、じっくりと相手の言葉に耳を傾け、相手の思いを想像し、自分の言いたいことを的確に伝える言葉を探すことが身についた。また、ダブルの児童生徒の日本語習得レベルに適した日本語を選んで話すことも、心がけてきた。言語の異なる児童生徒と関わる機会には、ここでの経験を役立てていきたいと思う。

この2年間、学校行事を支える保護者の姿を多く見てきた。行事までの準備や片付けなど、児童生徒のことを考えて企画してくださっていた。教員として、可能な限り協力して共に行事を作る楽しさや大変さを体験することができた。そんな時も、当たり前だが、事前にしっかりとコミュニケーションを取り、教職員が協力し、児童生徒が笑顔になることを一緒に楽しめる環境、人間関係作りが大切だと感じることができた。

バンドンでの様々な経験を今後の教員人生に役立てていきたい。今まで日本で、インドネシアで、サポートして下さった多くの方々、そして家族に感謝している。

シカゴ日本人学校に赴任して～

明石市立鳥羽小学校 白根 佐知子

1、アメリカ・シカゴの概観

北米大陸の大部分を占めるアメリカ合衆国は、日本の25倍の広大な国土を持ち、資源も豊富である。そのなかでもイリノイ州の街シカゴは、五大湖の1つミシガン湖のほとりに位置し、アメリカ第三の都市である。ダウンタウンには1871年の大火後に建設された歴史あるビルが建ち並んでいる。冷凍食品・家電・工業機械などの工業が盛んで、マクドナルド・ユナイテッド航空などがシカゴ発祥の企業である。シカゴには、白人・黒人・ヒスパニック系、アジア系などの様々な人種の人々が住んでおり、様々な国の文化にふれることができる。

冬の寒さは厳しく、ミシガン湖から吹き付ける風が強く、別名「Windy City」と呼ばれている。赴任2年目にはシカゴでも数十年ぶりに-30℃を記録し、体感気温は-45℃にもなった。反対に、夏は湿度も低く涼しく過ごしやすい日が多い。

2、シカゴ日本人学校の概要

シカゴ日本人学校はシカゴの街から北西に1時間ほど離れたところに位置する。周りは住宅街でリスや兎が庭先で遊びまわる自然豊かな土地で、治安もよい。

シカゴ日本人学校は、1978年に開校し、2018年度には創立40年を迎えた。幼稚部・小学部・中学部に分かれており、大きな行事には全学部で取り組んでいる。幼稚部小中学部は共に各学年1クラスで構成されており、園児約50名、児童生徒約150名、教職員約50名である。どの学部の児童生徒もお互いのことをよく知っており、休み時間は学年を越えて遊ぶ姿が見られる。全校生がバス通学であるため、8時半に登校、小学部1年生も6校時まで授業をし、16時前に下校となっている。

土曜日には同じ校舎を使い補習校の授業が行われている。補習校に通う児童生徒のほとんどが月曜から金曜日には現地校に通っている。同一の校舎を全日校と補習校が利用しているのは、非常に珍しい。



3、特色ある教育実践

学校目標 「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動できる児童・生徒の育成

～国際社会にはばたくシカゴっ子をめざして～

(1) 英語科教師による習熟別指導

シカゴ日本人学校全日校では、幼小中で一貫した英語教育活動を行っている。本校英語科は派遣教員1名ネイティブ教員5名の計6名で構成されており、学年に応じて文科省の学習指導要領に準拠した英語指導を行っているとともに、アメリカのESL教育を取り入れた本校独自のカリキュラムに取り組んでいる。派遣教諭は英語科のチーフとしてコーディネーターとしての役割も担っている。

児童生徒の実態として、アメリカでの滞在歴のある子どもから、渡米して初めて英語にふれる子どもまで幅広い。そのため授業は、児童生徒一人ひとりの英語力を伸ばせるように、5段階の習熟度別クラス編成を組んでいる。

小学部は週に4時間、学年層で5つのクラスに分けカリキュラムを作成し、英語で英語の学習をしている。初級クラスでは、フォニックス、中級クラスでは単語や文法、上級クラスでは読解の学習をしている。初級と中級クラスでは、現地のESLクラスと同じ教科書を、上級クラスでは現地のLanguage ART（国語）と同じ教科書を使用している。

中学部は週に5時間、派遣教諭とネイティブの教諭が授業を行っている。教科書もクラス別に採用し、上級クラスでは、現地校のコミュニカレッジのESLクラスに相当する難易度の高いものを使用している。英語初心者の生徒でも3年間で英検準2級合格という高い目標を目指す生徒も多い。

(2) 現地理解教育

① 交流学習

小学部・中学部共に、「異文化を理解し尊重し、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図る」というねらいのもと、毎年現地の学校との交流学習を行っている。小学部は学年ごとに交流する学校が異なる。交流 GO と交流 COME として年に2回お互いの学校を訪問している。(派遣初年度は3回) 自己紹介の手紙を送った後、1回目の交流をしている。会った時からすぐに仲良くなれる児童、なかなか話しかけられない児童など様々である。



さらに、小学部では、1月に交流校を招いて「双葉フェア」という行事を行い、現地の友達に日本の遊びや文化を伝える活動をしている。各学年どんなことをしたいか話し合い、「ダルマ落とし」「的当て」「あわおどり」「書道体験」「ゆかた着付け体験」などの活動を考え、おもてなしをしている。回を重ねるごとに、現地校の友達との仲も深まり、また、英語で日本の文化を伝え、達成感を感じることができる活動である。

中学部では、交流 GO と交流 come の他に、現地のミドルスクールへの1日体験もあり、現地の学校の普段の授業を体験している。

② 日本の文化・アメリカの文化に触れる行事活動

小学部では、アメリカの文化を理解するため、ハロウィン集会を開いたり、学校の向かいにある教会のクリスマスコンサートに参加したりしている。

また、日本から遠く離れていても、日本の文化も大切にしてほしいという願いから七夕集会や百人一首大会、書き初め大会などの行事も行っている。特に百人一首大会への取り組みは意欲的で、1月の大会に向けて時間を見つけてはクラスで練習をしている。大会当日の児童の様子はとても真剣で、厳粛な雰囲気の中、大会が開かれている。

(3) 学部を越えた活動・行事

小学部6年生の中学部体験、中学部家庭科の保育での幼稚部との交流、小学部3年生と幼稚部のたこあげ、幼稚部と小学部1年生活科の秋見つけ、学部を通しての交流も活発である。

大運動会の応援合戦は中学部が中心となりダンスや歌を考え、練習を計画している。小学部1年生でも取り組めるような内容を考え、中学部や高学年の応援団が低学年にわかりやすくダンスや歌を教える姿が見られる。

秋には表現力を高め、団結力を高める双葉フェスティバルという行事もあり、各学年で劇や合唱に取り組んでいる。最初は恥ずかしがっている児童生徒も、練習を重ねるにつれ、堂々と台詞を言ったり歌を歌ったりしている。児童生徒も保護者も、この大きな2つの行事を楽しみにしている。



4. 成果

様々な都道府県から派遣された先生方、現地の先生方に出会うことができ、いろんな角度からの考え方・教え方を学ぶことができた。授業のやり方・指導の仕方を話し合うことで、今まで自分がしてきたことを再確認することができ、また、今まで知らなかった方法や、現地の学校の様子・中学部の様子・学校全体を見る、ということを知ることができた。

遠い国で目を輝かせて日本の学習を楽しんでいる子どもたちを目の前にして、授業の大切さを改めて感じた3年間であった。1時間でどんな力をつけたいのか、どうすればわかりやすくなるか、どうすれば子どもたちが主体的に取り組めるかということを考え、教材研究や準備をすることを今まで以上に心がけるようになった。

いろいろな都道府県から来た友達をやさしく受け入れることができる日本人学校の子どもたち、様々な人種が住んでいるアメリカに暮らし、国籍・性別・人種を問わず他者を受け入れ理解できる子どもたちを見習い、またシカゴで学んだことを生かし、今後の教育活動に生かしていきたい。

～コロナ対策 帰国前と帰国後～

ブラッセル日本人学校

3月18日に日本に帰国、2週間経過観察として自宅待機

広州日本人学校

【 帰国前 】

春節休みが1月25日より2月2日。春節休み中に、2月3日より休校になる決定。

2月1日、妻と子ども達は感染予防のため、日本へ一時帰国→妻の実家で2週間の隔離生活。広州は移動の制限（地下鉄や高速道路）は特になかったが、外出の制限や公共の場所でのマスク着用、各場所での検温が始まる。マスクや消毒は中国でも無くなった。野菜も品不足になったが、すべての食品がなくなることはなかった。消毒と検温、外でランニングなどをして免疫力アップに努めた。食事は、ワイマイ（日本で言うUberEATS）や自炊で対応。外出の機会を減らした。住居マンションに入る際も検温が必要。37.5℃以上あると、再検温。それでも高い場合は、検査の病院に連れて行かれる。コロナ感染者がでたマンションについては公表されるため、すぐに地図上で発生者の場所が表示されるアプリが開発され、利用。自分の位置や健康を表明する「穗康」というアプリが政府によって導入され、公共の施設などを利用する際に提示を求められるようになった。身分証や電話番号、履歴を政府が一括で管理する仕組み。それ以外にも政府は携帯の発信履歴や wechat の通信履歴から、個人の位置情報もすべて把握していた。

【 帰国後 】

3月8日に緊急帰国。9日0時より成田と関空にしか到着しない、2週間の隔離が必要になったため。8日は東京都内のホテルに宿泊、新幹線で新神戸、バスで淡路島へ帰る。実家の2階に家族とも離れて隔離生活を開始した。広州にいるときは「自分が感染しない」ことを大切にいたが、帰国の際は空港や機内など不特定多数の人と接触することになる。「他人に感染させない」ことへの努力や配慮の方が大変だと感じた。ドアノブや蛇口など、なども触ることで、家族内での感染が広がるのだと感じた。触ったものへの消毒の意識は、日本では低いと感じた。中国ではアイさん（おてつだいさんや従業員）がしていたため、私もしていなかったが。

ブエノスアイレス日本人学校

【帰国前】

3月上旬の段階では、赴任地アルゼンチンでは「対岸の火事」といった感じであったが、世界的な拡大に伴い、アルゼンチンにおいても感染者が発生し、緊張が増してきました。

アメリカから日本への飛行機の減便に伴い、当初、ヒューストンから成田へ飛ぶ便が予定されていましたが、ヒューストンからダラスへ飛び、成田へ向かう便に変更になりました。出校日（現地出発日）は3月15日でしたが、その翌日からはアルゼンチンから欧米への便はすべて欠航となっていたので、ギリギリのタイミングでの出国となりました。

【帰国後】

帰国後2週間は、海外からの入国とのこともあり、自主的な判断であまり家の外に出ないように心がけました。

バンドン日本人学校

【帰国前】

3月中旬、インドネシアのバンドンでは、コロナウイルスの感染者がまだ出ていない状態であった。しかし、薬局に売っているはずのマスクはどこも売り切れであった。病院などにコロナウイルスへの予防を促すポスターが貼られ始めた。3月下旬、バンドンでも感染者が報告され、一気に自粛規制が行われた。大きなモールの閉鎖や、幹線道路の通行止めなどである。その後、車移動時の乗車人数の限定など、人との接触や密にならないような規制が行われた。

【帰国後】

4月上旬原籍校での勤務が始まった際に、インドネシアから帰国教員がいると知った保護者が、市の教育委員会や学校にクレームを言ってきた。しかし、事情を話すと理解を得られた。保護者は、児童からの話を聞きコロナの感染状況が悪化している「インド」からの帰国と勘違いしていたことや、帰国後2週間以上開けて学校に復帰していることなどを伝えることで理解していただいた。

ジッダ日本人学校

【帰国前】

3月に入って以降、サウジアラビアでは、コロナウイルス患者は日本ほど出ていませんでしたが、3月9日より、サウジ教育省の指示により現地校・インター校とも休校とすることや、教師も学校には立ち入ってはいけない旨の通達が前日の8日にあり、急に学校行くことができなくなりました。8日は、通達を聞いてから、9日以降の家庭学習のプリント準備と、卒業式等の行い方の話し合いを行いました。学習は1日1時間程度、コンパウンド内で、事前に準備したプリントをチェックしました。クラスによってはレクリエーションのようなことをしたようです。私のクラスは、うどん作りを保護者と交えて行い交流しました

卒業式は3月12日の予定でした。予行まで済ませていましたが、本番はできなくなりました。9日から、児童生徒、教職員の住んでいるコンパウンドにある校長宅で打ち合わせを行い、卒業式は行わず、卒業生を送る会と、離任式の代わりにお別れの会を、住んでいるコンパウンドのホールを使って行うこととなりました。来賓等は参加せず児童生徒とその保護者、日本人学校教師のみで行いました。通知表等は、その会のあとに手渡ししました。

【私の帰国について】

私は当初、3月16日に帰国する予定で、引き継ぎや荷物のパッキングなどを進めてきていました。(3月10日)帰国予定日のエミレーツ航空が3月15日の便をもって、ジッダからの国際線を飛ばさないという情報が入ってきたことにより、総領事館や校長等と相談の上、1日早い15日に帰国することを決定しました。(3月12日)1日早くなったことで、あわてて荷物をまとめたり、引継ぎを作ったりしていましたが、今度はサウジアラビア政府が3月14日をもって国際線の離発着を行わないと言う情報が総領事館に入ってきました。急遽再び話し合いがなされました。(3月13日朝)最終的には、帰国前日の13日の朝に、翌14日の帰国が決まりました。さらに1日早くなったので、最終的には保護者様にもパッキングを手伝ってもらうことになりました。(3月14日)ジッダを無事飛行機は飛びました。離陸前にトランジットのドバイ入国前に健康チェックなるカードを配られました。私たちはトランジットだったため、何もチェックされませんでした。東京では、非接触体温計で熱を測るのみで、スムーズに入国できました。

※リヤド校の教員は、情勢が変わる中、当初の15日帰国のまま準備を進めていった結果、15日の

便が出ず3月の帰国はできませんでした。

【帰国後】

早期帰国の派遣教員は、文科省には寄らずパスポートを郵送にて送ることとなりました。返却は5月10日でした。医療費等の請求にパスポートコピーが必要となるため少し困りました。次年度派遣者(この4月派遣)は、ジッダには行けず、在籍校に待機しています。

担当の理科の引継ぎは、理科室や学習園の動画を撮ったり、薬品台帳ソフトの使い方を動画で撮り、LINEで送ったりして引き継ぎました。LINEでつながっているので、派遣されてからも、理科に関しては24h7dサポート可能体制をしています。

【サウジアラビアの今】

サウジアラビアは以降、午後3時から朝の6時が外出禁止となりました。そして、現在は24h外出禁止、スーパーはドライバー+1名のみ、子どもはスーパーに入れられないなどの措置がとられています。コンパウンドに住んでいる住人は、コンパウンド内でテニスをする以外は、プールやホールなども使えない毎日を過ごしているようです。ラマダン中は少し規制が緩くなっているようですが、ラマダン後の休暇は24h外出禁止が原則となっています。

R2年度の始業式は、住んでいるコンパウンドで行い、授業はSkype等使って行っているそうです。

バンコク日本人学校

【帰国前】

〈1月〉・下旬頃から少しずつ、新型コロナの話題が出始めたが、冬休み中に一時帰国していた生徒は特に対応は必要なかった。

〈2月〉

- ・4日 タイ保健省より 校内での「アルコール消毒」や「手洗い」の励行の通知
…登校時、休み時間、体育の授業後、昼食前のアルコールジェルによる消毒
来校者のアルコール消毒のお願い
- ・17日 タイ保健省より 日本等からの入国者の検疫強化の発表
…受験等で日本やシンガポールから帰国した生徒は、症状があれば、検査を受ける。
- ・23日 タイ保健省より タイ入国後、14日間は自己観察の協力を要請
…この週末に、一時帰国した生徒、教員も自宅待機の協力要請あり。
- ・27日 タイ教育省より タイ入国後、14日間、日本等からの入国した生徒、職員、家族の入校禁止
50人以上集まる活動の禁止等の通知
…3月初旬に、日本の公立高校等の受験のために帰国する生徒も多く、27日が学年最終登校日になった生徒がいた。(急に決定の通知が来たため、当日知らせるような状況だった。)

- ・28日 …卒業生、在校生ともに、卒業式の合唱を録音

〈3月〉

- ・2日 …卒業式(7日)実施しない、9日~11日臨時休校、12日修了式 保護者に通知。
- ・6日 …卒業証書授与式のみを、体育館でクラスごとに実施。(証書授与のみ)
その後、卒業生、在校生ともに、自教室で、放送による、校長式辞、答辞、在校生合唱(録音)、答辞、卒業生合唱(録音)、校歌斉唱(伴奏のみ放送)という形で、卒業式を行った。
- ・9日~11日…在校生臨時休校

- ・12日 …修了式（13日の予定だったが、1日前倒し）、放送による校長式辞、各学年の作文発表。
退学書類は、直接生徒に持ち帰らせた。（例年は、保護者来校）

《帰国日》

- ・タイ出国 17日 …当初の予定通りの便で帰国。搭乗ゲートに向かう前に、検温があり、搭乗許可のスタンプを押される。
- ・日本入国 18日 …特に大きな検査等もなく、（もしかしたら、サーモグラフィーのようなものがあったのかもしれないが…）入国できた。

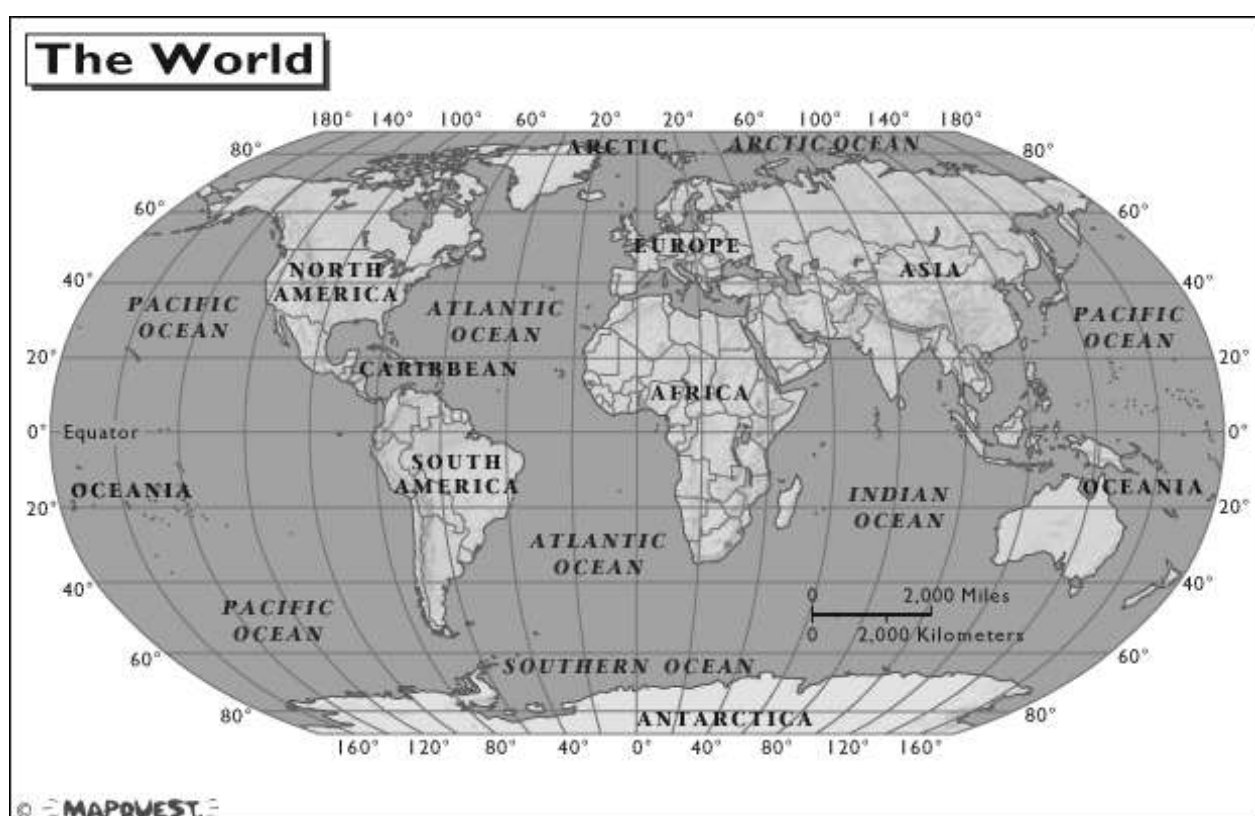
【帰国後】

- ・原籍校の訪問、市教委への面接等以外は、基本自主自宅待機をし、4月1日より勤務開始。緊急事態宣言が発出されてからは、隔日で在宅勤務を行ったり、時差出勤を行ったりした。（和歌山県では、県より家族全員検査を受けるよう指示があったり、鳥取県では、自宅待機を要請されたりしたと聞いた。）

★バンコク日本人学校の対応★

- ※3月末に、急に本帰国を決めた生徒や、逆に、退学予定だったが復学した生徒もあり、学級編成の見直しが必要だった。
- ※春休み前から日本に一時帰国していて、未だタイに戻れていない生徒もいるが、日本でオンライン授業に参加している。
- ※休校中に退学を決めた生徒については、オンラインでの退学届けの受理を行っている。
- ※バンコク日本人学校では、4月の始業式が、5月1日になったが、6月30日まで緊急事態宣言が延長され、在宅学習が続いている。
- ※4月中に、オンライン学習ができるように、保護者にIDやパスワードを配布。
- ※教科書や副教材については、ドライブスルー形式で、保護者に自家用車かタクシーで取りに来てもらった。
- ※Google classroom を活用しているが、インターネット環境が脆弱なタイでは、双方向の学習が難しいため、動画配信や課題の配布等を行っている。質問は、チャット機能を活用して、教科担任に聞くこともできるようである。
- ※また、授業で使うデジタル教材については「NHK for School」や自立学習応援プログラム「すらら」等を活用している。
- ※クラス発表は、5月下旬に、保護者にメールで個々に知らされた。
- ※7月から、分散登校が始まる予定だが、タイ国内への航空機の乗り入れが制限されている状況で、新派遣の先生方は、来タイのメドが立っていない。
- ※8月頃の来タイの可能性を考え、1学期中は、クラスを分けて（4クラスを5クラスに）、仮担任をおく形で、進めていく方向である。
- ※通常登校になった2学期には、4クラスに戻すらしい。（まだはっきりわからないが恐らく…）
- ★タイは、政府や教育省の指示は絶対で（日本も同様だと思うが）、その通知や指示がかなり急におりてくる。1日2日で、対応が急にも変わることもあり、その都度対応に追われる。
- ★PCやネットワークの環境が整っていない家庭には、できるだけPC等の購入や環境整備を保護者にお願いしている。（日本と違い、経済的に安定している家庭が多いからこそであるが…）
- ★新派遣の先生方がいない中、教科や学年によっては、アンバランスになっているようである。（例えば、本来ならば3名いるはずの教科が、1人しかおらず、課題の配布や点検などを1人で行わなければならないなど。）

《活動状況》



活 動 状 況 目 次

令和2年度	兵庫県在外教育施設派遣教員一覧	44
	兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織	45
令和元年度	事業報告	46
令和元年度	多文化共生・国際教育セミナー実施報告	47
令和2年度	事業計画	48
令和2年度	多文化共生・国際教育セミナー計画書	49
	兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則	50
兵海研	入会申込書	52

令和2年度(2020年度) 兵庫県在外教育施設派遣教員一覧

□■ 令和元年度 帰国者 ■□				
				おかえりなさい
■ H29(2017)年度派遣 ■(派遣時25名)				
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
篠原 功二	インドネシア	ジャカルタ	川 西	北稜小
中村 陽希	タイ	バンコク	加古川	加古川中
林 由加子	タイ	バンコク	西 宮	甲子園浜小
西村 一将	中国	天津	加古川	別府西小
河野 真也	中国	広州	南あわじ	三原中
吉田 菜由	中国	深圳	神 戸	魚崎小
山本 佳奈	中国	上海(虹橋)	宝 塚	丸橋小
加未 亮平	中国	上海(浦東)	西 宮	上甲子園中
長江 麻里子	中国	蘇州	播 磨	蓮池小
崎田 真宏	中国	大連	篠 山	八上小
榎本 龍	フィリピン	マニラ	神 戸	上野中
齊藤 真実	ベトナム	ホーチミン	神 戸	渦が森小
白根 佐知子	アメリカ	シカゴ	明 石	鳥羽小
久保田 信	アルゼンチン	ブエノスアイレス	丹 波	柏原中
岸本 紗矢子	アルゼンチン	ブエノスアイレス	神 戸	兵庫中
小野寺 裕美	ブラジル	マナウス	明 石	山手小
北野 貴誠	イタリア	ミラノ日本人学校	尼 崎	大成中
菅原 庸介	ドイツ	デュッセルドルフ	伊 丹	天神川小
西尾 由紀子	ドイツ	デュッセルドルフ	加古川	綾南中
藤地野 左智	ドイツ	ミュンヘン	西 宮	大社中
古川 英治	ベルギー	ブラッセル【頭】	淡 路	江井小
竹山 森汰郎	サウジアラビア	ジェッタ	相 生	双葉小
田邊 晃子	インドネシア	バンドン	芦 屋	宮川小
應供 亮生	ベトナム	ハノイ	豊 岡	日高西
仲 順也	カナダ	トロント補【長】	伊 丹	シニア派遣

□■ ただいま奮闘中 ■□				
				派遣3年目
■ H30(2018)年度派遣 ■(派遣時29名)				
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
小林 悦子	インド	ニューデリー	たつの	室津小
宗倉 等	インド	ニューデリー	神 戸	シニア派遣
加藤 裕章	インドネシア	ジャカルタ	宝 塚	安倉小
内田 琢也	ベトナム	ホーチミン	加古川	別府西小
倉垣 尚恵	シンガポール	シンガポール(チャンギ)	丹 波	崇広小
尾鼻 祐也	中国	北京	穴 粟	波賀小
内田 麻杏舞	中国	上海(虹橋)	神 戸	長坂小
村崎 千鶴	中国	上海(虹橋)	芦 屋	シニア派遣
沖田 真理子	中国	上海(浦東)	尼 崎	シニア派遣
稲留 博史	マレーシア	クアラルンプール	尼 崎	園田小
高崎 雅子	マレーシア	ジョホール	猪名川	猪名川中
福原 くみこ	台湾	台北	神 戸	長坂中
橋 真希	アメリカ	ニューヨーク	加古川	平岡北小
川邊 満久	メキシコ	アグアスカリエンテス	神 戸	西郷小
原田 真弥	オーストリア	ウィーン	神 戸	蓮池小
清水 圭介	オランダ	アムステルダム	明 石	山手小
東 明彦	スイス	チューリッヒ	丹 波	シニア派遣
宮本 千香代	イギリス	ロンドン	伊 丹	摂陽小
小阪 学史	ロシア	モスクワ	尼 崎	杭瀬小
井川 信也	オーストラリア	シドニー	三 田	シニア派遣
衛藤 理佐	オーストラリア	シドニー	伊 丹	天神川小
高田 顕子	オーストラリア	メルボルン	姫 路	網干中
今井 省悟	カタール	ドーハ	伊 丹	笹原小
富田 貴也	サウジアラビア	リヤド	川 西	東谷中
荻野 俊也	チェコ	プラハ	丹 波	シニア派遣

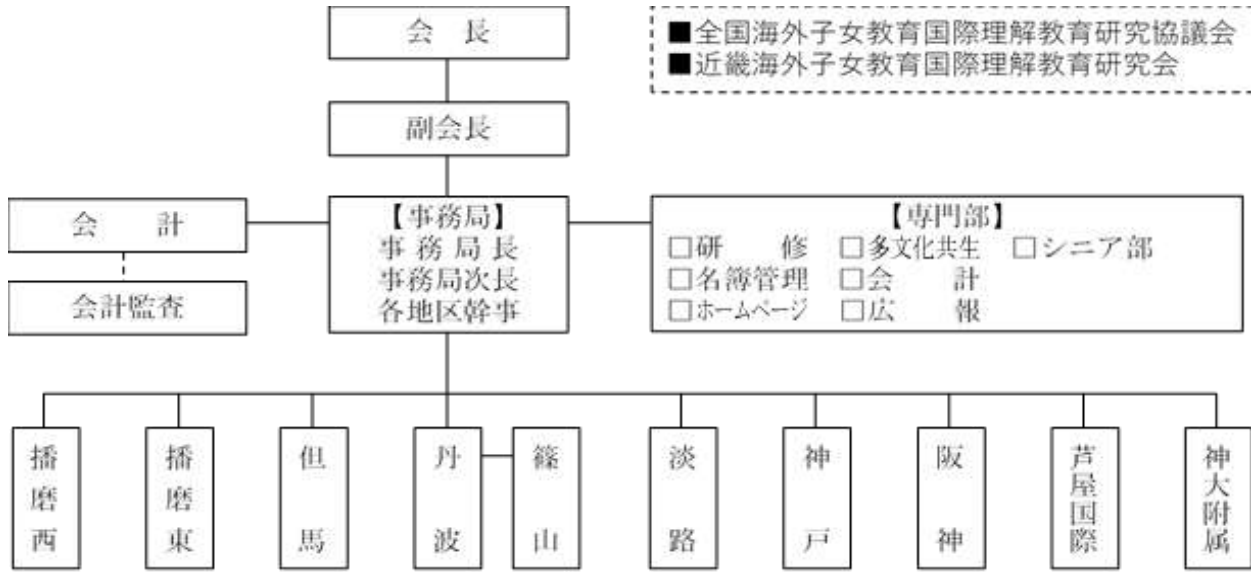
□■ ただいま奮闘中 ■□				
				派遣2年目
■ RO1(2019)年度派遣 ■(派遣時33名)				
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
房村 亜矢	インド	ニューデリー	西 宮	夙川小
北岡 良仁	インドネシア	ジャカルタ	川 西	明峰小
岸本 久子	インドネシア	ジャカルタ	三 木	広野小
北川 衛	インドネシア	ジャカルタチカラカラン校	西 宮	鳴尾中
小山 里枝	スリランカ	コロンボ	神 戸	桂木小
森 優太	タイ	バンコク	川 西	多田小
石川 優	タイ	バンコク	淡 路	西淡中
宮崎 雅文	タイ	バンコク	尼 崎	立花南小
福岡 達郎	タイ	バンコク	西 宮	樋之口小
三浦 亜紀	中国	北京	伊 丹	笹原小
神谷 早希	中国	天津	神 戸	こうべ小
枝廣 直樹	中国	広州	尼 崎	尼崎北小
植垣 和久	中国	上海(虹橋)	西 宮	深津小
大野 元気	中国	上海(浦東)	西 宮	山口中
原田 善一	中国	杭州	明 石	高丘西小
上玉利 友美	中国	香港(大埔)	宝 塚	すみれが丘小
久保 有基	中国	香港(大埔)	明 石	山手小
山野 陽子	フィリピン	マニラ	赤 穂	塩屋小
齊内 慎一	マレーシア	クアラルンプール	西 宮	津門小
日下部 望	マレーシア	ジョホール	西 宮	生瀬小
江籠 千絢	マレーシア	ペナン	明 石	明石小
関口 浩之	台湾	台北	淡 路	広田中
山本 紗矢佳	台湾	台北	神 戸	春日野小
太田 裕志	カンボジア	プノンペン	養 父	関宮中
緒方 靖子	アメリカ	シカゴ	神 戸	布引中
吉田 耕平	アメリカ	ニュージャーシー	多可町	中町中
春名 祥吾	ブラジル	マナウス	尼 崎	水堂小
庄司 幸三	メキシコ	アグアスカリエンテス(頭)	尼 崎	シニア派遣
望月 優生	メキシコ	グアナフアト	姫 路	城乾小
猿澤 夏美	スペイン	バルセロナ	尼 崎	立花北
松田 拓	UAE	アブダビ	神 戸	鷹取中
山田 祐史	シンガポール	シンガポール中学部	県立高	香住高
田中 陽介	パキスタン	イスラマバード	明 石	魚住中

□■ 本年度 新規派遣者 ■□				
				派遣1年目
■ RO2(2020)年度派遣 ■(派遣時26名)				
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
足立 浩	インド	ニューデリー【長】	丹波篠山	多紀小
橋本 誠	インドネシア	ジャカルタ		シニア派遣
真野 佳奈	ベトナム	ハノイ	明 石	二見西小
濱端 寿子	タイ	バンコク	淡 路	一宮小
櫻木 美那	タイ	バンコク	神 戸	有瀬翔
古川 貞之	中国	青島	朝 来	和田山特別支援
黒田 由紀美	中国	青島	神 戸	霞ヶ丘小
岡田 麻依	中国	深圳	姫 路	城西小
小倉 寛樹	中国	上海・虹橋【頭】	明 石	魚住東中
加納 秀元	中国	上海・虹橋	宝 塚	山手台小
服部 陽子	中国	上海・虹橋	姫 路	荒川小
前海 瞳	中国	蘇州	加 西	加西中
天野 有香	フィリピン	マニラ	高 砂	米田西小
牛島 敏雄	フィリピン	マニラ	三 木	広野小
米谷 明子	マレーシア	クアラルンプール	豊 岡	日高小
後藤 裕亮	台湾	台北	明 石	衣川中
岡本 麻代	台湾	台北	尼 崎	武庫北小
芳田 晴美	ブラジル	マナウス	川 西	緑台小
浅田 智之	メキシコ	日本メキシコ学院	尼 崎	琴ノ浦高
高見 宏子	イタリア	ローマ	たつの	神岡小
岸本 洋人	イタリア	ミラノ	明 石	魚住小
吉田 晴輔	オランダ	アムステルダム	神 戸	垂水東中
堀川 浩規	ドイツ	デュッセルドルフ	三 田	三田小
橋 寛志	UAE	ドバイ	小 野	市場小
上田 忠治	イラン	テヘラン	尼 崎	難波小
中村 富美	ベトナム	ハノイ	淡 路	シニア派遣



令和2年度

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織



会長	松本 肇仁	事務局長	塚本 与久
副会長	高木 浩志(組織)	事務局次長	中井 治嗣(組織・渉外)
	小畑 幸一(組織)		小池 宏尚(渉外)
	大月 祐三(研修)		原田 英聖(研修)
	島多 峰史(研修)		小嶋 拓也(研修)
	田中 秀滋(帰国報告会)		徳野 雅信(研修)
会計	二谷 洋平		村上 貴士(研修)
研修	小谷 仙嘉(帰国報告会)		増田 恵津子(研修)
	上坂 浩一(帰国報告会)		田邊 晃子(研修)
	中澤 大樹(セミナー)		河野 真也(研修)
名簿管理	中井 治嗣		二谷 洋平(組織)
	二谷 洋平		松田 一樹(組織)
多文化共生 (教育相談)	貞松 千佳子	矢野 越史(組織)	
監事	小池 宏尚	ホームページ	原田 英聖
	照本 忠光、中馬 義治	広報	小池 宏尚
シニア部	照本 忠光		西口 美希
		宮田 正彦	

地区幹事			
神戸	徳野 雅信、榎戸 二郎	播磨西	山本 みのり、小谷 仙嘉
阪神	岡坂 隆志、山村 裕二、稲中 伸彦	播磨東	水田 良
丹波	梅垣 泰三、伊藤 憲司、西田 隆之	但馬	中沢 泰明、大月 祐三
篠山	浅田 智之、中野 純也、五十川 聡	淡路	美濃 正明、河野 真也
芦屋国際中等教育学校	貞松 千佳子	神大附属小中	藤中 寛子

顧問	谷口 哲、生野 康一、橋本 力、茶谷 紀元、青木 芳信、西田 富男、		
	横田 政美、榎田 邦夫、串光 宏治、森本 孝、宮田 正彦、中馬 義治、		
	照本 忠光、水岡 俊一、丸山 一則		
海外幹事	足立 浩、藤本 孝仁、東 明彦、庄司 幸三		
全海研顧問	生野 康一	全海研副会長	高木 浩志
全海研事務局次長	原田 英聖	全海研研修担当	塚本 与久

令和元年(2019年)度 事業報告

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会(北海道・旭川大会)への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会(奈良大会)への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会・歓迎会 5/4(土) 兵庫県民会館
- (2) 帰国報告会 6/15(土) JICA 関西
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）
 - 第1回 5/4(土) 『海外子女教育の概論』（場所：兵庫県民会館）
 - 第2回 6/15(土) 【帰国報告会】（場所：JICA 関西）
 - 第3回 10/26(土) 【近畿ブロック大会】（場所：奈良女子大学）
 - 第4回 12/21(土) 『在外教育施設での多文化共生について』（場所：県立のじぎく会館）
 - 第5回 2/22(土) 『保護者の目・派遣OBを交えて』（場所：県立のじぎく会館）その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして 「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後HP上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携 近畿ブロック奈良大会（奈良：奈良女子大学） 10/26(土)
- (9) 全海研本部との連携 全海研北海道大会（北海道：旭川トーヨーホテル） 8/22(木)～24(土)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ 兵庫県国際交流協会 ・ JICA 関西
 - ・ （公財）海外子女教育振興財団関西分室
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ 兵庫OV教員研究会

令和元年(2019年)度 多文化共生・国際教育セミナー報告書

下の表のように5回の研修会を行いました。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月4日（土） 14：00～17：00 兵庫県民会館 (神戸市中央区下山手通 4-16-3)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：高木 浩志
第2回	6月15日（土） 10：00～17：00 JICA関西 (神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2)	帰国報告会 2018年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月26日(土) 14：00～16：00 奈良女子大学 (奈良県奈良市北魚屋東町)	第30回近畿ブロック国際理解教育研究会 奈良大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月21日（土） 14：00～17：00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	「兵庫の子ども多文化共生教育について」 講師：小池 宏尚
第5回	2月22日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会 かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

令和2年(2020年)度 事業計画

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会への協力/参加

2 事業計画

(※—は、新型コロナウイルス感染症のため中止・延期になった事業)

- (1) 総会 ~~5/2(土) 兵庫県民会館~~ ⇒ 8/8(土) 県立のじぎく会館
- (2) 帰国報告会 ~~6/13(土) 姫路市市民会館~~ ⇒ 8/8(土) 県立のじぎく会館
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）
 - ~~第1回 5/2(土) 『海外子女教育の概論』 (場所:兵庫県民会館)~~
 - ~~第2回 6/13(土) 『帰国報告会』 (場所:姫路市市民会館)~~
 - ~~第3回 10/31(土) 【近畿ブロック大会】 (場所:和歌山県)~~
 - 第1回 8/8(土) 『海外子女教育の概論・帰国報告』 (場所:県立のじぎく会館)
 - 第2回 12/19(土) 『在外教育施設での多文化共生について』 (場所:県立のじぎく会館)
 - 第3回 2/20(土) 『保護者の目・派遣OBを交えて』 (場所:県立のじぎく会館)

その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後HP上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携 ~~近畿ブロック和歌山大会 10/31(土)~~ ⇒ 次年度に延期
- (9) 全海研本部との連携 ~~全国大会(宮崎県・宮崎市) 8/20(木)～22(土)~~ ⇒ 中止
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県国際交流協会
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ (公財)海外子女教育振興財団関西分室
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ 兵庫OV教員研究会

令和2年(2019年)度 多文化共生・国際教育セミナー計画

年間5回のセミナーを計画していましたが、新型コロナウイルス感染症のため、下のよ
うに3回の研修会に変更しています。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月2日（土） 14:00～17:00 兵庫県民会館 (神戸市中央区下山手通 4-16-3)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：松本 肇仁
第2回	6月13日（土） 10:00～17:00 姫路市市民会館 (姫路市総社本町 112)	帰国報告会 2019年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月31日(土) 14:00～16:00 和歌山・信愛大学 (和歌山市住吉町 1)	第31回近畿ブロック国際理解教育研究会 和歌山大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第1回	8月8日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	①「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：松本 肇仁 ② 帰国報告
第2回	12月19日（土） 14:00～17:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	①「在外教育施設での多文化共生について」（予定） 講師：島多 峰史 ② 帰国報告
第3回	2月20日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	① 在外派遣を考える～配偶者の立場から～ 講師：関西帰国生親の会かけはし ②「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

予定の変更等は、兵海研のホームページにてお知らせします。

【 ホームページアドレス 】 <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>

【 お問い合わせ先 】
兵海研事務局（塚本 与久） Email: hyo1982kai@gmail.com

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則

■第一章■

第一条 本会は兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（略称；兵海研）と称する。

■第二章■ （目的および事業）

第二条 本会は国際的視野にたった海外子女教育および国際理解教育の充実発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 海外子女教育・国際理解教育に「関する研究の推進
2. 海外子女教育・国際理解教育にかんする研究会，交流会の開催
3. 海外子女教育に関する教育相談の実施
4. 会員相互の情報交換を行うための会報の発行
5. 在外教育施設に派遣中の教師に対する情報交換や援助
6. 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会との連携に基づく活動
7. その他 本会の目的を達成するために必要な事業

■第三章■ （会員）

第四条 本会の会員は在外教育施設に派遣された者および本会の趣旨に賛同する者で年会費を納入した者で構成する。派遣時に年会費を納入した者は，3年間準会員として本会から連絡等を受けることができるものとする。

■第四章■ （役員）

第五条 本会には次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 事務局長 1名
4. 事務局次長 若干名
5. 会計部長 1名
6. 専門部長 若干名
7. 地区幹事 若干名
8. 幹事 2名
9. 顧問

第六条 役員は総会において選任される。

第七条 会長は本会を代表し会務を総括する。

副会長は会長を補佐し，会長に事故のあるときはその任を代行する。

事務局長は本会に関する事務を行う。

事務局次長は事務局長を補佐する。

会計部長は本会の会計の事務を行う。

専門部長は各専門部の活動を推進する。

地区幹事は地区の会員をまとめ，地区の活動を推進する。

幹事は本会の会計を監査する。

顧問は必要に応じて置くことができる。

第八条 役員任期は1年とする。但し再任は妨げない。

補欠により選任された役員の任期は前任者の在任期間とする。

第九条 本会は事務局を事務局長の勤務場所に置く。

■第五章■ (機関)

第十条 本会に次の機関を置き、会長がこれを召集する。

1. 総会
2. 役員会

第十一条 総会は毎年1回召集する。但し必要に応じて臨時に召集することができる。
役員会は必要に応じてこれを召集する。

第十二条 総会は次の事項を審議する。

1. 事業計画
2. 予算および決算
3. 会則の変更
4. その他 必要事項

※緊急かつやむを得ない事情により総会を開くことができないときは役員会の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について、次回の総会で承認を得なければならない。

第十三条 役員会は次の事項を審議する。

1. 総会での審議を要しない事項で、本会の運営に関する事項
2. 総会に提案する議案の検討
3. その他 会長が必要と認める事項

■第六章■ (会計)

第十四条 本会の費用は会費・寄付金・その他の収入をもってこれにあてる。

第十五条 本会の会費は年額3000円とする。

第十六条 本会の会計年度は、毎年総会に始まり、翌年の総会の前日に終わるものとする。

(この会則は昭和57年9月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、昭和62年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成元年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成3年6月2日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成8年5月25日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成9年5月24日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成11年5月8日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成15年5月10日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成24年5月6日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成30年5月5日から施行する)

海外子女教育・国際理解教育・多文化共生教育に関心のある皆様へ

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)入会のご案内

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会事務局

私たち兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)は、兵庫県内の小中学校教員が中心となって組織している研究団体です。県内の国際理解教育や帰国子女教育・多文化共生教育、また、派遣教員による海外子女教育の充実・発展をめざして精力的に活動しています。ぜひ兵海研に入会し、一緒に学び合いませんか。

【 会員特典 】

- 兵海研が主催する各種セミナーに、無料でご参加いただけます。
- 兵海研からの情報(セミナー案内、派遣先関連等)を提供いたします。
- 兵海研の海外子女教育、国際理解教育に関わるネットワークにご参加いただけます。

【 主な活動 】

- 国際教育セミナー(在外教育施設派遣希望者研修会)
- 在外教育施設帰国教員による帰国報告会(海外教育事情等)
- 派遣教員激励会、帰国教員歓迎会の企画
- 近畿ブロック国際理解教育研究大会
- 在外教育施設派遣教員への支援活動
- 文部科学省内定者研修(東京)での兵庫連絡会
- 県内各地域での国際理解教育・多文化共生教育実践交流
- HPによる活動報告や国際理解教育関連の情報提供 等

【 会 費 】

年会費 3,000 円 (会場費や資料代に使用)

※ ネットワークや案内情報に活用しますので、下記『兵海研入会申込書』と共に納入してください。

◆郵便振替 名義 兵庫県海外子女教育国際理解教育研究会

口座番号 0900-7-94943

【 連絡先 】

事務局 塚本 与久(ツカモト トモヒサ)

E-mail: hyo1982kai@gmail.com

西宮市立高木北小学校(〒663-8024 兵庫県西宮市薬師町7番5号)

TEL 0798-65-6572 / FAX 0798-65-6573

キリトリ

令和 年 月 日

兵海研入会申込書

お名前		現所属	
海外との関係		E-mail	

※ 海外との関係(例:平成△年~〇〇日本人学校派遣 or 日本人学校に興味あり)